

---

# 2人で1人の勇者様

ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2人で1人の勇者様

### 【Nコード】

N7364Y

### 【作者名】

ハル

### 【あらすじ】

桜庭優と紅葉穹は両親がおらず、2人ぐらし。そんな2人が家を出たら異世界に召喚されて勇者になっていた。1人は大魔術師、もう1人は精霊術師となり2人で1人の勇者となる。名前だけ勇者は魔術学校に通い、そこでの日常と、微妙なバトル展開をお楽しみに。最後に説明下手ですいません。

## 召喚（前書き）

まずはじめに、こんな小説を読んでもいただき、ありがとうございます。

## 召喚

入学式に行こうと家を出た、桜庭優さくらば ゆうだ。そして今、親友の紅葉穹あかば そらは家から出た瞬間に、目の前が真っ暗になり、目の前に変なオッサンがいた……。

「なあ穹、俺達って……入学式に行く途中だったよな？」

「そうだね。僕達は普通に家を出たら、ここにいたと思うよ」

そう2人はいつも通りに一緒に家に出て、今日から始まる高校の入学式に参加しようとしていたのだ。

それが、何故こうなったのかは2人に全く心当たりが無かった。

「君達が異世界から来た者達か？」

2人にとっては、目の前のオッサンが話してる意味など言葉は分かっても、全く理解していないだろう。

「あなたが言っていることが全く理解できないのですが」

穹の言葉にオッサンが少し考える。

「お父様、いきなり召喚されたのです。状況が飲み込めてないと思います……」

「おおそうだった。いきなりここに召喚したんだ。混乱するのも無理はない」

オッサンの隣には、いかにも王女様と思われる美少女が座っていた。その容姿は長い銀髪に翡翠色の目、それにその思わず見惚れてしま

うほどに整った顔が印象的だった。

と言うことは、オッサンはもしかしたら国王様なのかもしれない。

「ここが日本でないなら、僕達が異世界から来た者だと思います」

こういう時の穹は冷静に物事を考えられる。

それとは逆なのが、その隣にいる優だ。

「なら、君達が異世界から来た者だ。ここはスビル王国。君達の日本と言う国は聞いたことがない」

「話は変わりますが、僕達はどうして異世界に召喚されたのですか？」

穹はあまり感情を顔に出さない場合が多い。そして、今も顔に出さずに冷静を装っている。そんな穹の心情が分かるのは、生まれてからの、ほとんどの月日を過ごした優だけだ。

「うむ、それも話さなくてはならないな」

「つまり、君達は勇者として召喚されたんだ」

「はい？」

優と穹は声を揃えて答える。これも、過ごした月日が成せる事だろう。

「勇者と言うのはな、戦争にならないための抑止力としての役割がある。勇者として異世界の者を召喚するのはこの国だけだが、どの国でも勇者は最強の名を有する」

2人は言葉に詰まる。脳の処理能力の方が追いつかないのだ。

「つまり、俺達は戦争の時には戦うけど、それ以外ではただの勇者って称号持つてるだけってことですか？」

「そついう風に捉えてもらってもよい」

「でも勇者が2人つてのはどうしてなんですか？勇者って普通は1人だと思うのですが」

そう、普通は勇者は1人。漫画やゲームの世界では勇者は1人しかないだろう。

「君達2人で勇者だからだ」

王様の答えは2人で1人の勇者らしい。

2人で1人と言うのは、中学卒業と同時に2人だけで生きてきた2人にとってピッタリな言葉だ。

「それで、勇者を引き受けてくれるか？」

この質問に対する答えは決まっている。断つても元の世界には帰れないだろうし、無理矢理にでも勇者にするだろう。

「いいぜ！」「分かりました」

返事に2人の性格が現れてるが、これが2人なのだ。

それに、2人とも勇者と言うのは満更でもない。

活発的な優はともかく、それとは対照的な穹までもが…。

「では、勇者の腕輪を」

どこからか魔術師のような格好の男が来ていて、手に持った盆の上の腕輪を差し出してくる。

「それは、その国の勇者にしか着けられない。それも勇者の人数分だけ用意されるらしい。今までは1人しかいなかったが、今回は2人で1人だからな」

王様が笑いかける。それを無視して2人は腕輪を手取る。

触れた瞬間に激しく光り、いつの間にか優と穹の手首には腕輪が着いていた。

「その勇者の腕輪は所有者の望む形状に変化し、その能力を発揮できる。あとは、腕輪が教えてくれるとしか、書いていない」

王様は先代の勇者が書き記した本に書いていたことを述べる。

「それでは2人には魔術学校に入り魔術を学んでもらう。それまでに初級魔術を娘のフェルミに習いなさい」

王女のフェルミがこちらに一礼してから近づいてくる。

「あ、あの、よろしくお願いします」

優の手を握って挨拶する彼女の表情を見れば、今の彼女の心情が手に取るように分かるだろう。

「優、いきなりフラグ立てるところは流石だよ」

優も穹もかなりのイケメンだ。2人とも自覚はしていないが、お互いがモテることは理解している。

「えっ、フラグなんて立ってないだろ？」

自覚なしの優にとっては、いつも通りの反応だし、この光景も特別珍しいというわけでもない。

「それでは、今日はゆっくり休んでください。明日から、この国の地理や歴史、魔術と簡単に教えるので」

「はい」「分かりました」

優は気のぬけた返事で、穹は事務的に返事をする。



## 召喚（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします。

## 契約

異世界に召喚された日は、フェルミが2人を城の中を案内した。そして2人はと言えば、城で出た見たこともない料理、フカフカすぎるベッドを堪能したのだった。

「優さん、穹さん、早く起きて下さい」

フェルミが直々に2人を起こしに来る。本来の客人は起こしに行かないし、王女が行ったりなどするはずがない。

つまり、異世界から来た人物、あるいは勇者とはそれほどの存在だと言っただ。

ただ、今回の場合は少し意味が違う。

「早く起きて魔術の練習をしないと、入学式までに初級魔術もできませんよ?」

そう、一週間後は魔術学校の入学式で、初級魔術から始めるが、それぐらいは出来て当たり前なのだ。

「…………おはよう」

穹が先に起きる。

だが、その隣のベッドで寝ている優は一向に起きる気配がない。

「……」

「いつてえ！穹、何すんだよ？」

穹が布団をめくって、太ももを思いつきり抓ったのだ。それは尋常じゃない痛さだっただろう。

「優が起きなかったからね。ちょっとしたスキンシップだよ」

「限度つてもんがあんだろ！」

「起きない人が悪いんです」

穹は意外と子供っぽい一面もある。今回がいい例だろう。

「あのお、食事が終わったら、魔術の練習をしたいのですが……」

「りょーかい！」「分かりました」

恐る恐ると語り掛けるフェルミに、2人はそれぞれの返事を返した。

朝食を取りながら、フェルミが予定を話し終わる。

「じゃあ、朝と昼は魔術で、夜は歴史と地理を日にちごと。ってことよろしいですか？」

「はい、それで間違いありません」

穹が事務的に質問し、それに、フェルミも答える。

穹は基本的に馴れない相手には、敬語や余所余所しい態度を取って

しまうのだ。

「魔術ってどんなのをやるんだ？」

「まだ説明してなかったですね」

魔術には、いくつか種類がある。

魔法、精霊術、この2つを纏めて魔術と呼ぶ。

魔法は自らの魔力を使い、不可能を可能にする力。

例えば、何も無い場所から火を生み出すことも、不可能なことを可能にしたという捉え方もできる。

次に精霊術は、自らの魔力を使い、精霊を召喚する力。

例えば、火の精霊を召喚し、その力を剣に纏わせたりできる。他にも精霊を使って魔法紛いのこともできる。上位の精霊になると、その精霊の属性の魔法を打ち消すこともできる。

魔法は発動が早いのと、応用が効く。

精霊術は威力が大きく、上位精霊にもなると天災のようなことも起こせる。

お互いに利点があるので、どちらの方が優秀と言っわけでもないので、今の時代まで生き残っているのだ。

「と言っわけです。何か質問はありますか？」

一通りに魔術のことを説明したフェルミに、優が手を挙げる。

「はい、ユウさん」

フェルミの顔が少し赤い。やはり一目惚れをしていたらしい。

「魔法と精霊術は分かったが、両方使えたりするのか？」

「基本はどちらかしか使えません。ですが、歴代の異世界から来た勇者の方々は、両方使えたりらしいですよ」

「じゃあ、俺達も両方使えるのか？」

「それは、そうなんではないでしょうか。ちなみに私は魔法の方を使います。それと、精霊術師は数がそんなに多くないので、魔法使いの方が多いいんです」

ここで穹が手を挙げる。

「あの、精霊って……契約とかいるの？」

「契約は必要ないはずですよ。呼べるか呼べないかですしね。あっ、精霊王と上位の精霊は契約が必要らしいです」

「なら、僕は使えると思います、精霊術」

「どうゆうことか説明して頂いても？」

さっきは両方使えるかとは言ったが、両方使える人間を見たことがないので、少し信じきれない部分があるらしい。

優が言っていたら、信じてたかもしれないが……。

「昨日の夜に夢を見たんです」

「内容を話してもらっても？」

穹は小さく頷く。

『小僧、力を求めるか？』

真っ白な空間にいる穹は、目の前にいる女の子から質問を受けた。

女の子は、見た目的には同じ年くらいだが、その内側に大きな何かを感じる。それが精霊王の魔力なのだが、穹には未だに正体が分からない。

『小僧、力を求めるか？』

「同じ年くらいなのに、小僧はやめてもらえますか？」

同学年の女の子に小僧と呼ばれて、いい心地はしないだろう。

だが、白くて長い髪に、赤い目、そして整った輪郭の彼女には、その言葉が可笑しかったのか小さく笑みを浮かべる。

『小僧、精霊王である私に、そんなことを言ってきたのは小僧が初めてだ』

「そりゃどうも」

『小僧は、力を望んでここに来たのだろうか?』

「貰えるものなら、貰っていきますよ」

『何のために力を望む?』

穹は少し考える。

「今の僕にとって大切なものは、親友で家族の優だけです。ですが、これから大切なものが増えても、僕が守れるぐらいの力は欲しいかな」

『つまり、他人を護るために力が欲しいのか?』

「そういうことです」

『おもしろい。ならば、私が小僧と契約してやる?』

「けっこうです」

予想外の答えに精霊王が固まる。

『では、力がいらぬのか?』

「それはいいります」

『だから、精霊王の私が力になってやる?……』

「分かりました。で、僕はどうすればいいんですが?」

『私と契約するから、手を出してくれ』

「はい」

『精霊王オーベロンは、此の者を契約者と認める』

簡単に言うと、精霊王オーベロンの体が光り、その光りが穹の右手の中指に集まり、その場所に指輪ができる。

「これって、どうなってるんですか?」

『私と契約したから、指輪になって、小僧と行動を共にするだけだぞ。必要なだけの魔力を流してくれると、実体化して戦うこともできる』

「うーん、とりあえずは分かりました」

「と、まあ、そんなことがありました」

「それって凄いことですよ?精霊王の契約者なんて、100年以上出てきてません」

「あっ、やっぱり夢じゃなかったんですね」



「くそう、俺が精霊王狙ってたのに」

優が本気で悔しそうにする。

「僕の勝ちだね、優」

「大丈夫ですよ、ユウさん。精霊で負けても、まだ魔法があります」

「…そうだな。魔法で穹より凄いの使えばいいのか」

「はい」

すぐに立ち直った優に、すぐさまフェルミは返事をする。

## 契約（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いいたします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします

## 初級魔法

「では、魔術の基礎を教えます」

「はい」「お願いします」

優は幼稚園児のような返事を返し、穹は丁寧に返事を返す。

「まず私は魔法しか使えないので、精霊術のソラさんはイメージだけ掴んでください」

魔法にはいくつかの属性がある。

代表的なものが4大属性の火、水、風、土がある。

それとは別に光、闇、雷、氷、無属性がある。

それぞれの属性には、初級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法がある。

例外として、無属性魔法にレベルはない。

そして、精霊術にもいくつか決まりが存在する。

精霊王を頂点として、火、水、風、土、光、闇、雷、氷の上位精霊が存在する。

下位、中位の精霊は呼び出しても実体化しないが、上位精霊になると実体化する。

そして、上位精霊になると呼び出すのに、合意が必要になる。ゆえに悪人が上位精霊を呼び出して天災を起こそうとすることはできない。

それぞれの属性の精霊は、その属性しか使えないが、精霊王のみ例外として、それぞれの属性を中位精霊ぐらい使えて、更に分解と再

生を使うことができる。そこが精霊王と呼ばれる所以である。

「魔法と精霊術の説明は以上です。そしてまずは精霊術ですが、教科書通りに言わせていただくと、上位精霊を呼び出すには精霊の名前を、下位と中位の精霊を呼び出すには頭の中でイメージするだけで大丈夫です。私は精霊術は使えないので、ここまでしか分かりませんが大丈夫ですか？」

「はい。方法さえ分かれば、後は僕が自分でやりますから」

「魔術学校に入れば専門的な部分も教えてもらえるので、続きは学校で教えてもらってください」

「分かりました」

申し訳なさそうに言うフェルミに、穹は優しく笑顔で答える。

「まずは初級魔法から入るので、右手を前に出して掌の上に炎の球体をイメージして下さい」

「おおーすげー」

掌の上には炎の球ができていて、それを見て興奮している。

「ユウさん、さすがは勇者ですね」

「……できない」

「えっ……」

フェルミと優の声が重なる。そして声の主である穹の方を見る。

「なあ穹……できないって……これがか？」

「うん」

「それって……センスないんじゃない？」

「だよな」

穹がさつきよりも落ち込む。

「なあフェルミ、苦手な属性だから出来ないとかってあるのか？」

「そりやたしかに上級魔法にもなれば得意属性しかできませんが、初級魔法は魔法が使える者なら誰でも使えますよ」

「じゃあ、俺は精霊術が、穹は魔法が使えないってことなのか？」

「普通の人はそうです。あと、事実としてソラさんに魔法が使えるいので、おそらくはそうだと思います」

「だってさ。穹は精霊術しか出来ないらしいぞ」

「魔法のセンスはないんだよね」

穹がどんどん落ち込んでいくので、すかさずフェルミがフォローに入る。

「精霊術はこの世界で最強になれる可能性があります。それで充分

「じゃないですか」

「世界最強……いいね」

穹がだんだん元気になっていく。

「優、精霊術を極めて、精霊術で魔法に勝つよ」

「望むところだ」

「じゃあ、僕は離れたところで練習してるよ」

「ああ」「あつ、はい」

穹が離れたところに行く。

「では続きですが、次は掌から水球を出してみてください」

その後も練習は続き、初級魔法は全属性一回目で使えるようになった。

次からは中級魔法も習うらしい。

魔法の練習も終わり、王宮にある2人の寝室

「なあ穹、精霊ってどのへんまで出せた？」

「僕は下位の精霊なら全種類出せたと思うよ」

「初級魔法は全ていけたから、俺と同じか」

「じゃあ優には魔法のセンスがあるんだね」

「魔法使いはけっこういるらしいからな、その中でトップってどうやったら分かるんだ？」

「最上級魔法を全属性使えたら最強なんじゃない？」

「たしかにそりゃ最強だな」

「あつても、最上級魔法つて4大属性しかまだ確認されてないらしいよ?」

「じゃあ、他の4つも俺が作れば歴史上最強だな」

「だね」

「じゃあ、寝るか」

「そうだね」

その日から魔法の練習をして、優は全属性の上級魔法まで、穹は4大属性の上位精霊まで呼び出せるようになった。

そして、魔術の練習ばかりしていたので、地理や歴史を全く勉強してないことに気づいたので、魔術学校入学の一週間から猛勉強することになった。

## 初級魔法（後書き）

ただひたすらに魔術学校の話が書きたくて、超展開にしてしまったことを、今この場を借りてお詫びします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄まで願います。  
評価、感想、お気に入り登録よろしく願います。



## 入学式

「なあ、入学式って普通は4月じゃないのか？」

「4月だと毛虫が出るから貴族が嫌がるんじゃないかな」

「あっ、そうだな」

「えっ普通は5月じゃないんですか？」

入学式に行こうと王宮を出て、魔術学校までの道のりを歩く途中、優と穹の会話にフェルミがつっこむ。

「僕らのいた世界では4月にやるんだよ」

穹のは初めて会った人や、信用でしない人には敬語を使う。だが、フェルミとも半月以上の付き合いなので、敬語ではなく優に使うものと同じような口調になっている。

「珍しいですね」

「俺らからしたら、こっちのが珍しいんだけどな」

「そんなものですか？」

「そうだよ。それに僕達は入学式の日こっちに来たからね」

「そついえば勇者の仕事って何かあるのか？」

「そうですねえ……」

優の問いかけにフェルミは少し考えるような仕草をする。

「ありません」

「「えっ!?!」」

「どうしたんですか?」

「いや、仕事がないなら、どうして呼んだの?」

「仕事はないですが、戦争を起こさないための抑止力にはなりません。勇者を相手にするだけでも、敵国の戦力はかなり落ちますから。それに、この国の勇者は一国の兵士が全員かかってきても勝てる。つて有名ですから、名前だけの勇者がいればそれでいいんです」

「名前だけでいいなら、別に召喚しなくても他の奴使えばいいんじゃないかったのか?」

「それはダメです。4国合同の魔術大会とかの国交を深めるイベントには勇者の参加が絶対です。その場で中途半端な人物を出しては、国の威信にかかる問題になります」

「そうゆうもんなのかね」

「じゃあ、他の国の勇者も召喚してるの?」

「他国の場合は、国内から選んでるらしいです。魔術大会での優勝者、王族の中で一番腕の立つ者、貴族院の話し合いで決定していま

すね。そして、その勇者はそれぞれが勇者の武器を持っています」

「僕らの腕輪も武器なの？」

「勇者の腕輪は変形する武器です。使い手の望む形態に変化します。そして、使い手の魔術を纏わせることも可能です。私は見たことありませんが、先代勇者は剣に魔法を纏わせてたらしいですよ」

「これってそうやって使うのか」

勇者の腕輪を見ながら言う優に、フェルミは驚愕の表情を向ける。

「もしかして知らなかったのですか？」

「「うん」」

「腕輪はどうして使い方を教えてくれなかったのでしょうか」

「本当は教えてくれたりせずに、知ってる人から聞いて使うのかもね」

「だな」

「残念ながら、私もそう思います」

15分ほど歩いたところで、大きな建物の前に到着する。大きさは大学くらいあり、敷地もそれくらいはある。

「どこか？」

「そうですね」

「でかいなあ」

「来るのは初めてですか？」

「王都から出たことないし、仕方ないじゃねえか」

「確かに外出しませんでしたね」

フェルミが顔を背ける。

これは、後ろめたいことがある者の態度だ。

「フェルミ？どうした？」

「いえ、何も」

「優、やめたげなよ。フェルミは僕達のカリキュラム設定をミスったことを、突かれるのが嫌で顔を背けてるんだから」

「ああ、そうか」

「分かってるから言わないで下さいよ！」

フェルミは涙目になりながら抗議する。

「いやあ、ついね？」

「ついね？じゃありません。ソラさんの性格がこんなに悪いとは思  
いませんでした」

「あー、穹の奴は基本的に猫被ってるからなあ。本性を出すってこ  
とは、フェルミが信用されてるってことだ」

「……それなら許しますけど、言葉には気をつけて下さいね」

「フェルミも無理のない計画をね？」

「あああああ、聞こえませんが。私は何も聞こえません」

フェルミはまるで小学生のような反応をする。

校内に入り、入学式の会場らしき場所を探すが、正門からは少し距  
離があるらしい。

「あつ、じゃあフェルミの好きな人言っちゃうよ？」

「嘘です。すみません」

「なあ穹、フェルミの好きな人って誰なんだ？俺の知ってる奴か？」

「知ってるって意味なら、よく知ってると思うよ」

（本人なんだし）

「俺のよう知ってる奴って穹ぐらいしか知らねえぞ。ってことは穹  
か？」

「相手が僕なら、フェルミがこんなにバラされるのを、恥ずかしが

らないと思っけどね」

「それもそうだな。まっ別にいつか。俺には関係ねえし」

「……むしろ重要人物です」

「ん？何か言っただか？」

「なんでもありません！」

「俺なんかしたか？」

「うーん……強いて言うなら、乙女心を踏みにじった、かな？」

「とりあえず、悪い」

「そんな誠意のない謝罪はいりません」

「じゃあ、俺にどうしろと？」

顔を真っ赤にしながらフェルミは手を差し出してくる。

「……会場につくまで、手を繋いでくれたら許してあげます」

「ん？そんなことでいいのか？」

「はい」

手を繋いだ優の顔も真っ赤になっている。

それを見て穹はニヤニヤとニヤつきながら、2人を見る。

(そういえば、女の子と手を繋ぐのって、小学校以来じゃないか？  
こんなに緊張するもんだっただけな)

(うう、どうしてユウさんは、そんなにいつも通りなんでしょう。  
これじゃあ、私になんて全く興味なしじゃないですか)

「……………」

「……………」

(ヤバイ、この緊張で、この静かさは精神的に辛いぞ。何か話題を、  
何か話題を。穹の奴、楽しんでないで、何か話せよな)

優は穹にアイコンタクトで、何か話せとの意図を伝える。さすがに  
人生のほとんどもを共に過ごしてきたからか、穹は何を伝えたいのか  
を理解する。

(何も話さなかったら、緊張してるのが伝わってしまうのではない  
でそうか。何か話題を……………。でも、いきなり手を繋がせたりしたら、  
いくら鈍いと言っても、そろそろ私の気持ちを気づいてくれてもい  
いですよね)

真っ赤になりながら手を繋いでいる2人を、穹はニヤニヤしながら  
見つめる。まるで、悪戯でもする子供のような笑みで。

「なんだかそうしてると、カップルみたいだね」

「……………」

「……」

フェルミが顔を真っ赤にして俯いてしまう。優は穹を怒りの形相で見る。

それに穹は悪戯が完了した子供のよ様な笑みを浮かべる。

（穹の奴、この場面での今の発言は地雷だろ？フェルミがかなり怒ってるじゃねえか）

（ソラさんはいったいどこまで私の心を抉れば気が済むんでしょうか。ユウさんもソラさんをあんなに睨みつけて、そんなに私とこ、恋人扱いされるのが嫌だったのでしょうか）

「ねえ2人とも、……もう付いたけど？」

「じゃ、じゃあ」

「は、はい」

優の方から切り出して、手を離す。

（あ、あぶなかったぜ。それより穹が何をしたいのか全く分からないんだが……）

（うう、やっぱり私は優さんに、女の子として認識してもらってないんですね。でも、私は諦めません。いつか絶対、私に告白させてみせます）

優は冷や汗を拭い、フェルミは決意を新たにして、ガッツポーズする。



そして、長つたらしいと思わせて、それほど長くもない校長の挨拶を聞き、入学式は終了する。

ちなみに、優と穹とフェルミは同じクラスになったが、それはどこの国の、どこの王様が手を回したからだとは、3人とも知るよしもなかった。

## 入学式（後書き）

なんかラブコメ展開にもっていかれそうですが、魔術学校での話は、恋愛：魔術戦闘を1：1または、3：4ぐらいにしようと思っ  
ています。

まあ、他の作品よりはラブコメ寄りってぐらいですかね。

あつ、あと昼ドラ的展開とかは予定してないです。むしろやるつもりはないです。

まあ、その時の気分にもよりますが……。

あと、作者がハッピーエンドを望んでるので、悲しいヒロインは出さないつもりです。

最後に

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## クラスメイトと班決め

「えーっと、桜庭優です。趣味はなし。優って呼んでくれ」

「ユウさんは貴族じゃないことになってるんで、苗字はいりません」

「えっそうなのか？……優です。以上」

フェルミが自己紹介に小声で指摘してきたので、言い直す。

言い直した後の自己紹介で穹が苦笑いを浮かべる。

「穹です。優とは兄弟みたいなものです。よろしくお願いします」

穹が丁寧に自己紹介をして、その後も数人続き、優の隣に座るフェルミも無事に自己紹介を終える。

「じゃあ、今から訓練合宿の班を決めてもらいます。自己紹介も終わったことですし、各自がコミュニケーションを取って、6人の班を作ってください」

真面目そうな女性の担任の指示で6人班になることになる。

それぞれ数人は見知った顔があったのか、そちらに声をかける。

「じゃあ、俺達3人は確定ってことでいいかよな？」

「僕は問題ないけど、フェルミは王族だし、貴族の人と組まなくていいの？」

「お父様はそれなりに面識がありますが、私はパーティーなんかで

の上辺だけの付き合いです。それほど親しいわけではありません。あつ、でも、幼馴染の子はクラスにいますね」

「じゃあ、呼んできたら？」

「そうします」

クラスのほとんどが立ち歩いて話しているが、優達は席を立たなかった。それはフェルミ以外にこの世界で面識のある人物がいなかった。

そこに、1人の少女が歩いてくる。

「あつ、あの、あなた達も平民出身ですよね？」

「『も』ってことは君も？」

「そ、そうです。それで、……平民同士で同じ班になればなあ、って思っています」

胸に掛かるか、掛からないぐらいの茶色の髪に、フェルミほどではないが整った顔立ちをした小柄な少女が話しかけてきた。

「このクラスに平民って俺らだけなのか？」

「あつ、はい。他は貴族の方が、それに使える方のみで、完全に平民は私達だけです」

平民でも貴族の援助を受けて、将来はその家に仕えることもある。

目の前の少女以外の平民は皆そのようにして、魔法学校に通っているのだろう。

「僕はいいけど、優は？」

「いいんじゃないか。フェルミも賛成すると思うし、名前……なんだったけ？」

「あつ、すみません。わたしはエリンっていいいます。ユウさんとソラさんですよ。」

「はい、合ってますよ。それでエリンさん。貴族の援助なしで、どうやって魔術学校に通えてるんですか？」

「それはですね……商人をやってる家系なんですけど、貴族よりの平民なんで蓄えはわりとあるんですよ。それに私は家を継ぎませんし、魔術の才能がありましたから、魔術師として生きていこうと思ったんです」

「そうでしたか。突然聞いたりして申し訳ありません」

「いえいえ。では、そちらはどうやってなのですか？」

「あー、俺らはな？」

「うん」

エリンの背後から来る2人の人物を見て、2人とも説明に困る。

「ユウさん、ソラさん、連れてきました。ん？この子は誰ですか？」

「「新メンバー」」

エリンを見ながら言うフェルミに、2人ともフェルミを見ながら答える。

「うえ!？」

何を言いたいのかわからない声を漏らしながら、エリンはフェルミの顔を見ながら慌てる。

「あつ、そうでしたか。これからお願いしますね」

「こここ、こちらこそよろしくお願いいたします王女様」

「そんなに緊張しないで下さい。あと、私のことは気軽にフェルミって呼んでください」

「そそそ、そんな恐れ多い。お、王女様を呼び捨てになどできませんん」

「私は気にしませんのに……」

エリンの反応を楽しんだ後に、優が声をかける。

「ってことで、俺達は王様に援助されてるんだ」

「こここ国王様に!？わたしは何と凄い方に声をかけてしまったのでしょう」

「僕ら自体は凄くないですよ。それに、僕らは王様に保護されてるみたいなもんですから」

「そ、そうなんですか」

エリンがホツとして胸をなでおろす。

さっきから慌てているエリンが小柄な体躯からか、どうも幼く見えてしまう。

その様子をフェルミの後ろから顔を覗かせる少女が見ていた。

「ねえねえフェルミ、あんたの本命はどっちなの？」

「アイラ！？な、何を言ってるのよ！」

「えっ、だって2人とも凄いカッコイイじゃない。で、どっちが本命なの？」

「言いません！」

顔を赤くしたフェルミが拗ねて顔を背けてしまう。

穹は面白がって、優にバレないように優の方を指差し、それに気づいたアイラが優を見てニヤニヤする。

「それで、その子がフェルミの幼馴染か？」

「あっ、うん。あたしはアイラ＝クリスティー。王国の魔術騎士団の団長の娘で、フェルミの幼馴染よ」

「俺は優で、こっちは穹だ。あと、その子がエリン。よろしく」

「こっちこそよろしくね。でも、あと1人足りないわね」

「誰か呼んでくれるか？俺らは知り合いいないから」

「うん。分かった」

この、赤い髪を肩に掛かるか掛からないかぐらいの長さにして、整った容姿の中性的な雰囲気をもし出してる少女がフェルミの幼馴染のアイラらしい。

アイラは教室中を見渡して、すでに4人ほど男子が集まったグループの中に、目的の人物を発見する。

「ヒューイ！」

「アイラさん！？」

「あんた、婚約者なんだからこっちの班に来なさい！」

「無茶言わないで下さい。自分はまだ班を決めてますから」

「うん、分かった。でも、こっちの班に来なさい」

「分かってないじゃないですか！」

「分かるのと納得するのは別よ。いいから来なさい」

「はあ、そう言うことらしいので、すいませんが失礼します」

ショートカットの金髪に、どちらかと言うとイケメンの部類に入る青年がアイラの婚約者のヒューイ。

ヒューイはメンバーに出て行くことを伝え、アイラ達のいる方までとぼとぼと歩いてくる。



「じゃあ、これで6人揃ったな」

「けっこう無理矢理感はあるけどね」

「うう、わたしだけ立場が変です」

「私達は気にしないから大丈夫ですよ」

「そうだぞ、あたしから見たらヒューイの方が立場ないから」

「それってどういう意味ですか？あつ、自分はヒューイ＝フラムステイドです。長いのでヒューイとお呼びください」

優、穹、エリン、フェルミ、アイラ、ヒューイの順で言う。

そして、誰もヒューイの突然の自己紹介には何も言わず、そっとしてあげている。

「意外と強そうだね」

「確かに、ユウさんとソラさんがいれば心強いです」

「いや、フェルミ、ソラは強いが、俺はまだフェルミに勝てないと思っぞ」

「そうですか？私はユウさんが本気になれば負けると思いますが」

「知り合い相手に本気で戦えないから、今は負けてるな」

2人で話し始めたところに、アイラがニヤニヤしながら入ってくる。

「公共の場でイチャつくな！」

「い、イチャついてなどありません。アイラはいつからそんなに面白いジョークが言えるようになったのですか？」

「ジョークねえ？フェルミはユウのこと好きなの？」

「そ、そんなこと言ったらユウさんに失礼です」

「ふーん、否定はしないんだ」

「そろそろ虐めるのは可哀想ですよ？」

アイラはニヤニヤしながらからかっていたが、同じくニヤニヤした穹に止められる。

フェルミは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「フェルミ様がユウ君を好きで、アイラさんがヒューイ君の婚約者」

エリンは小声でぶつぶつと状況を整理している。

周りから見たら今のエリンは小動物を連想させて、かなり可愛いだろう。

「あー、何この可愛い生物。食べちゃいたい！」

「ア、アイラさん！？」

「いいじゃない、いいじゃない。女の子同士なんだからさあ」

「いけませんよ!」

アイラは可愛いもの好きなのか、エリンに抱きついている。

「自分は目立ちませんが。頑張るのでよろしくお願いします」

「あっ、うん、頼む」

無理矢理連れてこられたことに、半ば開き直ったヒューイが優によく分からないアピールをする。

「意外とこのチームだと何とかなりそうだね」

「だな」

優と穹はそれぞれクラスという空気に懐かしさを感じるのだった。

## クラスメイトと班決め（後書き）

次回からは訓練合宿でキャンプ行きます！

先に目的を言っておくと

- 1、クラスメイトとの親睦を深める。
  - 2、クラスメイトの実力を知り、より精進しようと努力すること。
- ですかね

ってことで、読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 訓練合宿？

「そう言うわけで、今日から2日間合宿です。とりあえず明日まで生き残ってください。じゃあ解散」

パンっと手を叩き、それが合図なのか他の生徒が皆それぞれ適当に歩いていく。

「なあフェルミ、これって合宿だよな？」

「そうですよ」

「サバイバルの間違いじゃねえよな？」

「違いますよ。サバイバルはまた別にあります」

「とりあえず明日まで生き残れ糞ヤローども、って解釈していいんだよな？」

「そこまで酷いか知りませんが、概ね合ってると思いますよ」

「そうか……」

優は珍しく落ち込んでいるようだ。理由は分からないが。

「優って昔から、こう言ういかにもめんどくさそうな嫌いだもんね？」

「ん？ああ確かに昔から嫌いだったかもな」

「じゃあ、どうする？全員で協力する？それとも個人戦？」

「わ、わたしは皆さんと協力したいです。まだ死にたくないです」

「あたしはどっちでもいいよ」

「自分も夜は安心して寝たいので、夜だけ一緒にいいです」

「私もヒューイさんと一緒に」

エリン、アイラ、ヒューイ、フェルミの順で発言するが、けっこう見事に意見が分かれる。

「俺はどっちでもいいぞ」

「僕もどっちでもいいけど、間を取って夜だけ一緒にいいよね？」

「ヒューイ、襲ったら殺すからね？」

「じ、自分は襲いませんよ」

慌てて否定するヒューイに、アイラがジト目で見る。

「ふーん……まあいいけど。それで集合場所は？」

「日が沈むところに、ここでいいんじゃないか？」

「優にしては珍しくまともな意見だね。じゃあそれでいい？」

全員がそれぞれ頷いて、全員適当に森の中の散策を始めた。  
この訓練合宿は、冒険者が依頼を受けて討伐に行ったりする森で普通に行われてるため、魔獣もそこそこに強いのが出たりするのだ。

「何かいねえかな」

全員と別れてから10分ほど優は1人で森の中を探索していた。  
この合宿では食料も自分で調達しないといけないので、魔獣を倒したりして食料を調達しないとイケないのだ。

ガサガサ

「おっ!?!」

テンプレだが、優のはるか前方から何か来るのが分かる。

「グガアアアアア」

(えっ、何この声? 威嚇なのか? もしかして、めっちゃくちゃヤバイのが来てるんじゃない?)

声を聞くまではドキドキしていた優だったが、今は別の意味でドキドキしていた。

そして、目の前にその姿を現す。

「えーっと、その……人違いです」

それだけ言って回れ右。駆け足前、進め！で一気にかけていく。魔獣と言うより魔物の外見は、大きさが5mはあり、人型で緑の体に赤い目があった。

通常の冒険者が討伐依頼を受けるゴブリンよりも、更に上位に位置するオークゴブリンだったのだ。

オークゴブリンの討伐は通常Bランクの冒険者からで、魔術学校の一年生が簡単に討伐できるものではない。

それに

「あんなの食うとこねえじゃねえかよ」

そう食べるところがないのだ。

つて言うよりも食べれるところはあるかもしれないが、とても食べる気にはなれない。

「グガアアア」

オークゴブリンはまた意味の分からない吼え方をして、優を追いかける。

「くっそお」

<カマイタチ>

優の手から放たれた<カマイタチ>がオークゴブリンの足を捉えるが、皮が切れた程度で特にダメージはない。

「硬すぎだろ！」



<エクспロージョン>

火の上級魔法でオークゴブリンを何度も襲う。

5分ほどずつとくエクспロージョン>したところで、オークゴブリンの生死を確かめる。

「おっ、死んだか」

緑だった体は真っ黒になっており、ところどころ体の一部が無くなっていたが、人型をした炭の塊にしか見えない。

「あーっ、しんど。何か見つけて帰らないと穹の奴がうるさいよなあ」

そう言って、優はまた食料探しの探索に出た。

優がオークゴブリンと戦った4時間後、穹は何故か森から山岳地帯に来ていて、その魔物に遭遇していた。

「あらまあ、道に迷ったと思ったら、変なのに遭っちゃったよ」

そう言った穹の目の前にいるのは大きさだけで15mはある怪鳥だった。

某狩りのゲームに出てくるヤクックに似ているが、決してヤンククではないと言っていることにおっう。

穹を見るなり、空へと飛び、口から炎を吐いて攻撃してくる。

「えーっと、とりあえず新兵器試してみようかな。銃<ガンナー>」  
穹の声と共に勇者の腕輪が光り、その姿を長銃に変える。

「あのサイズの魔物に効くのか試さないかね」

<凍結弾>

氷の下位精霊を纏った弾が放たれ、怪鳥に命中する。

命中した場所を中心に、半径1mほどが凍りついているが、大きなダメージは与えていないようだ。

<炸裂弾>

「ブレイク」

火の下位精霊を纏った弾が、怪鳥の手前で、穹の声と同時に大きな炎を巻き上げる。

炸裂弾の爆炎の直撃をくらった怪鳥はけっこうなダメージを負ったようで、さきほどまでのような素早い動きはできないでいる。

「もう一発炸裂弾食らわせれば死ぬと思うけど……最後に大技試してみようかな」

<水龍弾><放電弾>

水の下位精霊を纏った水龍弾と、雷の下位精霊を纏った放電弾が、ほど同時に撃たれる。

放たれてすぐに水龍弾は、水でできた5mほどの水龍のような形になる。

その中に放電弾が入ったまま、まっすぐに怪鳥の方へ飛ぶ。

<ブレイク>

怪鳥まで3mほどのところで放電弾から、かなりの雷が放電される。どンドン水龍が小さくなり、怪鳥の目の前で水龍の姿は無くなった。

<ブレイク>

放電弾が放電した時に撃つておいた炸裂弾から、爆炎が放たれ、それがすぐに大きな音と共に大爆発を起こす。

「やっぱりできた。でも、威力が強すぎるから至近距離でやったら自殺行為かな」

最後の大技は、水龍を放電弾で電気分解し、怪鳥の周りに大量にできた水素に炸裂弾の爆炎が引火して、大規模な水素爆発を起こしたのだ。

一瞬の出来事で怪鳥は真っ黒にはなっていないものの、全身が酷い火傷ですでに死んでいた。

「これなら食べれるかな」

<重力弾>

土の下位精霊を纏った弾を怪鳥に撃ち、重力をほぼ0にする。効果は一時的だが、何度も繰り返し返せば1人でも運べるのだ。

「はあ、こんなに食べれるかな」

そう言って穹は怪鳥を担いで、さらに4時間かけて戻るのだった。

それを見た他の生徒は、怪鳥が大きすぎて穹が見えず、怪鳥が現れたと大慌てだったらしい。

## 訓練合宿？（後書き）

はあ、優の戦い方が普通です。けっこうショックですね。捻ろうにも、捻れない戦い方です。王道すぎですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 訓練合宿？

「なあ穹、その鳥どうしたんだ？」

「迷ってたらいきなり襲われたから、とりあえず食べれるかなって思ってたって帰ってきた」

特に変わったこともないかのように優と穹が話す。

他のメンバーはそれを呆れて声も出ないと行った表情で見ている。そこで、今まで魔術を教えてきたからなのか、一番驚きの少なかったフェルミが代表して声をかける。

「穹さん、その魔獣はデスフレアと言ってますね、冒険者が山岳でのクエスト時に炎のブレスで殺されてるから、そんな名前と呼ばれてるんです。それにデスフレアは冒険者でもCランクのパーティー、または個人でもAランクレベルでないと普通は倒せませんよ」

「……デスフレアなんて自分は初めて見ましたが、さすがに大きいですね」

「あたしも自分でそれなり強い方やと思ってたけど、さすがにコレには勝てないわよ」

「こ、こんな大きな魔獣初めてみました。穹君凄いです！」

フェルミの後に、ヒューイ、アイラ、エリンとそれぞれ感想を述べる。

その中で2人だけ違う意味で悩んでいた。

「なあ穹、これってどうやって食うんだ？」

「焼いたらいいんじゃない？鳥だし」

「でもよ、こんなでけえ鳥初めてだぜ？味付けも変えねえと途中で飽きるだろうしな」

「そこは優に任せるよ。優の方が料理得意だしね」

他のメンバーは2人ってほんと仲いいな、とでもいったげな目で見ている。

この後にその矛先が自分に無垢とも知らずに……。

「他の奴の方ができるかもしれねえぜ？」

「じゃあ聞いてみれば？」

「こんなかに料理が得意な奴はいるか？」

2人の会話を見ていた全員が、周りを少し見してから答える。

「私は王族なのでしたことがないですよ」

「あたしやったことないわ。公爵家だししなくてもいいしね」

「お、お菓子なら少しはできます」

「自分に聞くのは野暮ってもんです」

フェルミとアイラは貴族だから必要ないとのこと。エリンはお菓子

しか作れないらしい。  
ヒューイに至っては……キッチンの中も見ることがないかもしれない。

「らしいよ？頑張ってね料理長」

「穹、お前も少しは手伝え！」

「僕は調達してきたからいいんじゃないの？それより優は何も捕まえなかったの？」

「いや、俺は……アレを倒したんだが……アレはさすがに…食べん  
だろ？」

「……確かにね、僕もアレは食べたくないよ」

珍しく歯切れの悪い優の態度を、オークゴブリンの姿を見て納得するのだった。

真っ黒に焦げてるが、さすがに5mはある人型の魔物など食べたい人などいないだろう。

ヒューイとアイラは呆れ顔を浮かべ、エリンは驚いて声もでないらしい。

「……見なかったことにして、デスフレアの話が続けよう」

アイラの呼び掛けに、全員が無言で元々そのつもりだったのか頷く。

「油とか調味料がないから唐揚げはできないし……、焼き鳥とかス  
ープ系しか無理だと思っよ」



「唐揚げって何ですか?」

「「えっ!?!」」

フェルミの疑問に優と穹が同じような反応を示す。

それとは逆にフェルミ、アイラ、ヒューイ、エリンはそれが普通の反応のように、答えが返ってくるのを待っている。

「唐揚げって言うのは……僕らの住んだ国にあった料理だよ」

「そ、そうだぜ」

フェルミは元の世界の料理だと分かっているので、別に異世界から来たことを隠さなくてもいいと思っているのだが、2人は違ったようだ。

穹は淡々と語っているが、優は嘘を誤魔化す子供のような雰囲気をしていた。

穹は絶対に嘘が上手いが、優は嘘についてもすぐに見つかりそうだ。

「優と穹はどここの国の出身なのですか?」

「えっ!?!」

「えーっと……極東って言われるくらい、かなり東に行かないと着かないかな?」

「疑問系なのが気になりますが、とりあえず遠いところから来たことだけは分かりました」

ヒューイの質問はしてくる予想はできる質問だが、いざ言われる慌

ててしまい、穹も嘘を誤魔化す子供のような雰囲気になってしまった。

「もうめんどくせえから丸焼きでいいんじゃないかねえか？」

「ちゃんと中まで火を通してね」

「私は本来ならテーブルマナーを損ねるような行為はどうかと思いますが……優さんが作るのであれば食べたいです」

「あたしはそれでいいよ」

「自分もこの際食べれば何でもいいです」

「わ、私もそれでいいです！」

アイラとエリンは賛成、ヒューイはお腹が空きすぎてるらしい、フェルミに至っては特に触れない方がよさそうだと、2人は感じた。

「よし、でも俺がやると焦げるから、誰かやってくれよ」

「優さんが焼くのではないのですね……分かりました。ここは私の手料理を食べてもらいます！」

「あっ、うん。がんばってくれ」

フェルミの宣言に優は半ば適当に返してしまっ。

「火加減が分かりませんが……いきます」

<フレア>

フェルミが火属性の初級魔法でデスフレアを焼く。  
だが、フェルミ以外の全員が同じ感想を今持っていた。

「火小さすぎだろ！？こんなんじゃ、朝になっても焼けねえよ！」

「なっ！？やっぱり火が小さかったのですね……やっぱり私には無理みたいです。誰かやってください」

「……はあ、じゃあ僕がやるよ。銃」  
ガンナー

誰も料理しようとしないので、穹が溜息をつきながら、勇者の腕輪を銃形態にする。

<竜巻弾>

穹の銃から放たれた、風の中位精霊を纏った弾がデスフレアのちよつと目の前までくる。

「ブレイク」

<弑式カマイタチ>

弾がデスフレアを包むほどの大きさの竜巻になる。

そして、その中のデスフレアがカマイタチで斬られていく。

「危ないから離れててね」

<炸裂弾>

「ブレイク」

カマイタチの竜巻の中で炸裂弾から、大きな爆炎が出る。竜巻が爆炎を巻き込み、炎の竜巻になる。

「そろそろいいかな」

穹がそう言つと竜巻が小さくなっていき、皿代わりに取っておいた大きめの葉っぱの上に集まって落ちていく。

「さすが穹、いいかんじの焼き加減だな」

肉の見ながら優が感想を述べる。

「あんな武器は見たことありませんが、凄いです。精霊術をほとんど完璧に使いこなしてますね」

「デスフレアを倒したのは本当みたいね」

「こんなに細かいコントロールができるとは凄いですね」

「わ、私はもう何を見ても驚きません！」

フェルミは多少驚いていたものの、主に銃に驚いていたらしい。アイラはデスフレアを倒したところから疑ってたみたいだ。ヒューイは武器よりも精霊術に驚いている。

エリンは口では驚かないと言いつつも、顔はかなり驚いている。

「じゃあ食つか」

「そつだね」

一口では食べれないが、かなり小さく切られた肉は案の定完食はできなかつたので、放置していたら何故か朝には無くなっていた。

## 訓練合宿？（後書き）

久しぶりですが投稿します。

作者自身がキャラの感じを忘れつつあったので、少々キャラが変わってるかもしれませんが。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 訓練合宿？

「優起きて」

「ZZZ」

「返事がない。ただの屍のようだ。……じゃなくて、起ーきーろー  
！」

穹が無言に笑顔を浮かべて、優の腹の上に足を向ける。

『起きろ』の声とともに足を思いつきり優の腹に命中させる。

「むぐつ、い、いきなり何すんだよ！」

「優がいつまでも起きないから仕方なかった」

「だからって踏むことないだろ!？」

声にならない声を上げた優が、必死に追求するが、穹は急に真剣な表情になる。

「・・・」

「何か言えよ！てか、そんな真剣な顔して何かあったのか？」

「……肉が……朝用を取っておいた肉が無くなってた。優以外に犯人は考えられない」

穹が涙目で言うが、優には全く心当たりがない。

「一つ言うが、俺じゃない！外に置いてたから魔獣にでも食われたんじゃないのか？」

「夜通し見てなかった優が悪いと思います」

片手を挙げながら穹が言い、優が呆れた顔をする。

「何で俺が不眠番なんだよ！てか誰が不眠番してたんだ？」

「……決めてない」

「全員が寝てたのに、よく魔物とかに襲われなかったな。って言いなくなるぞ、それは。」

呆れ顔のまま優が言う。ちなみに他のメンバーは昨日歩きつかれたのか、就寝中である。

「優は頭悪いから、何度も徹夜で受験勉強してたし、優に任せたことになろうと思ったんだけどなあ」

「今『つもり』って言ったよな？」

「……言っていない」

「目逸らしながら言う奴のことは信用できねえぞ」

優と穹がいつものように話していると、モゾモゾと何か動く。



「アレ？二人とも起きるのが早いですね」

「おはようフェルミ、僕たちは元の世界では、新聞って言う情報誌の配達やってたから朝は早く目が覚めるんだよ」

（今の時間は7時くらいだから、別に僕たちじゃなくても起きてると思うんだけどね）

「そうでしたか。では、他の方も起こしましょうか」

「あつ、よろしく。じゃあ、僕と優は朝ご飯取ってくるよ」

フェルミは視線を一旦肉の置いていた方を見て、肉がないのを確認してから、他のメンバーを起こしに行く。それに伴い優と穹も朝食探しの旅に出る。

「優、肉も飽きたし魚にしようよ」

「俺はまだ食えるけど、魚でいつか」

「じゃあ……川はこっち」

「なんで方向音痴の穹が川の位置が分かるんだ？」

優にとって穹は今までで一番一緒にいる時間長い人物だ。

その穹が方向音痴なことも知っているのだ  
それ故の疑問だった。

「あー、僕って精霊術師でしょ？だから、精霊がどの辺りに集まっ

てるのが、何となく分かるんだ。それで、水辺付近は水の精霊が少し多く集まるから分かったただけだよ」

「精霊術って便利だな」

「精霊術は物に纏わせるのが前提だから、魔法の方が使い勝手は格段にいいと思うけどね」

「ああ確かになあ。精霊術師って不意打ちだと弱そうだしな」

優の発言に、一瞬だけ穹がその表情を歪める。

自分が精霊術師だからか、今の発言は精霊術よりも魔法の方が優れてると言ってるように聞こえたのだ。

「そつでもないよ？精霊が敵意とか魔力を感知して、必要な時は教えてもらうようにしてるから」

「もう何でもありだな、精霊術って……」

「精霊王と契約してるから、精霊を自由に使えるんだよ」

「精霊王と契約とか……穹って実はチート主人公なんじゃないか？」

「それを言ったらこの勇者の腕輪貰ってる時点で、二人共けっこうチートだよ」

「うっ、確かにそうだな。おっ、確かに川に着いたぞ」

現時点では穹の方が強いと思ってるので、話題を変える。

「『確かに』ってことは信じてなかったんだね」

「まあ、それはいいじゃねえか。それよりさ、魚捕ろうぜ」

また、話題が戻りそうだったので、別の話題に変える。

「全部で6匹は捕らないとね」

「今回は俺がやる」

「じゃあ、僕は見てるから、できたら呼んでよ」

そう言つて穹が川原の石に腰を下ろす。

その様子を見ていた優が、思わずため息を漏らす。

「うっし、やるか」

優は体内の魔力の一部を指先に集中させる。

<スパーク>

指先から雷が放たれ、水中を流れる。

本来は相手を麻痺させて、しばらく無力化させる補助系の魔法だが、川の魚にとってはそれだけでも、けっこう喰らうらしい。

「よし、後は魚を回収して帰るか」

水面に浮かんできている魚を優が全て拾う。

数にして10匹ほどで、少し多いが食べれない量じゃない。

「穹、帰ろっぜ」

「あっ、もう終わったんだ」

「俺を誰だと思ってんだよ。勇者だぜ？」

「それを言うなら僕もただどね」

穹は全く魚を持たず、優が全て持って皆が待ってる場所まで行く。

「なあ穹、何か強い魔力を感じないか？」

「精霊が教えてくれたから分かってるよ。でも、そんなに大きな魔力は魔術学校にはないし、かなり上位の魔物か何かだろうね」

「魔物だと思うが、その方向が問題だ」

「少し離れてるから距離までは分からないけど、どこにいるの？」

「俺達の拠点だ」

それを聞いて、驚きの表情を表す。

優がすぐに魔法の準備をして、穹の体に残るから抱きつく。

「な、何やってるの？」

「行くぞ」

<ウイング>

抵抗する穹を無視して、優は穹を抱えたまま飛ぶ。

全力で飛んだので、数秒で到着した。

「あんなの反則だろ」

「僕もあれは無理ゲーだと思うよ」

優と穹の視線の先にいるのは、ドラゴンの部類に入るが、ドラゴン種の中では最弱のワイバーンだ。

最弱と言ってもドラゴン種なのでA Aランクに位置する。他のドラゴンとなるとSランク以上なので、まだマシと言えばマシだ。

「さて、どうやって倒そうか」

二人の視線の先では、他のメンバーが魔法や剣術で応戦していたが、全くダメージを負わせている感じではない。

## 訓練合宿？（後書き）

次はワイバーン戦で、次の話で訓練合宿は終了予定です。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 訓練合宿？

「アレってどうやったら死ぬんだろうね」

「おいおい他人事かよ。お前が精霊王出したら済む話じゃないのか？」

「ああそれは無理。夢の中では何度か話したけど、呼んだらすっごい魔力消耗して、その日は動けなくなっちゃうから、ほんとにヤバイ時だけ呼ぶようになって言われてるんだ」

「精霊王って使い勝手悪いな」

「本人も気にしてるみたいだから、言わないであげて」

「あつ、うん。悪かったな」

その場にいない精霊王に同情する2人。  
フェルミ、アイラ、ヒューイは未だにワイバーンと戦っている。

「ん？おい穹、エリンがいねえぞ」

「あれ？ほんとだどこにもいない」

そう話ながら、風の飛行魔法を解除して、やっと3人の側に降りる。

「やっと帰ってきたわね。早くアレ倒してー！」

「エリンは？」

「エリンさんは……もう……うっ、うっ」

アイラの言葉に、優が質問で返し、フェルミが答える。

「えっ？もしかしてエリンって食べられた？」

「……エリンさんはワイバーンを見た瞬間に……動かなくなっ  
てしまいました」

「それでエリンってどこにいるの？」

「あちらに」

フェルミに言われた方を見る。

そこには倒れたまま動かないエリンの姿。  
優がエリンの側まで寄り生死を確かめる。

「……気絶してる」

「はい？」

優の言葉に穹が思わず聞き返してしまう。

「だから気絶してるんだって。エリンの場合……ありえるだろ？」

「……たしかにありそうだね。でも、実際にやってのけるとは思わ  
なかったよ」



「驚きすぎて許容量を超えたから、こうなったんだな。可哀想に」

「まだ死んでないけどね」

優がエリンに掌を合わせるので、穹がツツコミを入れる。

「とりあえず、アレを倒さないとな」

「無理です。さつきから何度も魔法攻撃を加えてるのですが、大したダメージは与えてません」

フェルミ達3人の消耗のレベルから考えても、かなり強いと考えられる。

それにダメージをほとんど与えていないのも気になるところだった。

「ワイバーンって防御魔法とか使うの？」

「使いませんが、鱗が成長に伴って折り重なって、物理防御が高く、その鱗も魔力に対する耐性がついてるので、魔術によるダメージはかなり軽減されてしまっんです」

「攻撃はどんな攻撃なの？」

「ドラゴンの種類にもよりますが、ワイバーンは火の魔法を使います。現にあのワイバーンは火のブレスを使ってみました」

穹がフェルミからワイバーンの情報を聞き、作戦を考える。

だが、優も穹も基本はめんどくさがりなので、穹は自分があまり前

線に立たない方法を考えている。

「ねえ優、僕の精霊術ってね、威力よりも手数なんだあ」

「魔力を多く込めればいいんじゃないのか？」

「うん、そうなんだけど、それだと疲れるんだよねえ。だからさあ優、派手に突っ込んできて」

「自分がめんどろなだけだろ？」

「そうだよ。だからさあ優、派手に突っ込んで、勝つか殺されるかしてきてよ」

笑顔で酷いことを言う穹に、誰も笑えなかった。

「はあ、もう何言っても無駄だろ？なら俺が突っ込むけど、魔法の対処までは手が回らねえぞ？」

「優は物分りがよくて助かるよ。魔法の対処は僕が全部やるから、安心して散ってきてよ」

「分かったよ。俺が合図したら突っ込むからな」

他のメンバーは穹の毒舌に冷や汗をかいていた。

「3」

「2」

「1」

「0」「行つてらっしゃーい」

走りだす優に、穹は気の抜けた見送りをする。

「形態変化、アクティブブーツ」

優の声と共に、勇者の腕輪が光り、その光が足に収束しブーツが出来る。

「おお、さすが優だね」

アクティブブーツを装着した優は、機動力が増し、スピード、跳躍、ステップが通常よりも桁違いに上がっている。

「じゃあ、僕も準備しますか。銃」ガンナー

穹も勇者の腕輪の形態を変化させ銃形態にする。

「遅いぜ」

<カマイタチ>

ワイバーンの後方に回り込んだ優の攻撃は、全てその鱗に弾かれる。

「ちっ、やっぱり初級魔法じゃ効かねえか」

「おーい優、魔力に対する耐性ってことは、防げる限界があるんだし、大技で片付けてよ」

「無茶言つんじゃ、って穹あぶな」

言いかけて、続きを言うのをやめる。

優の魔法でワイバーンの意識が優にあったのだが、穹の声で穹の方に移っていたのだ。

ワイバーンは穹に向けてブレスを放ったが、穹の銃弾が当たった瞬間に炎の塊は消えてしまった。

<ウイング>

優が空を飛んで、ワイバーンの上空を通って、穹の真横まで行く。無傷だと分かっている、その目で確かめたかったのだ。

「怪我はねえみたいだな」

「あの程度じゃ怪我のしようもないよ」

「だな」

ワイバーンがいつの間にか飛んでいた、優も再び空へと飛び立つ。

「うおっと、あぶねえ」

ワイバーンは魔法攻撃ではなく直接攻撃を仕掛けてくる。

真っ直ぐに猛スピードで飛んできての、翼での攻撃。単純だが、当たればかなりのダメージだろう。

ワイバーンは今度は炎のブレスを放つ。

<魔力分解弾>

穹が地上から闇の中位精霊を纏った弾を放ち、炎の塊に当たると、その魔力が分解され空气中に霧散していく。だが、炎のブレスの消えた中からはワイバーンが再び翼撃を加えようと突っ込んできている。すでに、優のよけるタイミングではない。

「優、あぶない」

穹が叫ぶ。他のメンバーはレベルの戦いのせいか全くついていけずに言葉もでない様子だ。

ワイバーンの攻撃が直撃する。

バチッ

バチバチ

優の体が放電し始める。

「えっ、優の魔法かな？」

穹も何が起きたのか分かっていなかった。

<アルターサンダー>

ワイバーンの真後ろに無傷の優が現れる。ワイバーンが攻撃した優は、優が作った雷の分身。

<サンダーランス>

優が右手を横に突き出す。

分身の雷が本物の優の右手に、一直線に飛んでいく。

間にいたワイバーンの胸に穴を空けて。

胸を貫かれたワイバーンは力なく地面に落下する。

それに続いて、優も地面に降りていく。

「ビックリしたか？」

「何も言わずに次やったら、僕が殺すからね」

「何も言えませんでした、泣きそうでした」

「心臓に悪いわ」

「行事で死人はまずいなって思いましたよ」

軽く怒った様子の穹に、泣きそうな顔のフェルミ、胸を抑えているアイラに、少しずれたセリフのヒューイがそれぞれ優に言葉を投げかける。

エリンは未だに気絶から覚醒しないらしい。

「お昼に湖に集まって帰るんだよね？」

「そうです」

「じゃあ、飯食ったら時間的にピッタリだな」

穹の質問にフェルミが答え、続いて優が話す。

この後は優と穹で捕ってきた魚を食べて、いろいろあった訓練合宿は終了した。

ちなみに、ここまで上位レベルの魔物と戦ったのは、優と穹達の班だけで、他はかなり弱い魔物や魔獣しかいなかったらしい。

## 訓練合宿？（後書き）

訓練合宿終わりですね。

次は魔法学校での日常を書こうか、中間テストにしようかで迷い中ですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。



## 科目選択

「優さんと穹さんは選択科目は何をとるんですか？」

「選択科目って何があるんだ？」

「体育系は嫌だなあ」

フェルミの質問に優と穹がそれぞれ答える。

「はあ、では説明します」

魔術学校では普通の学校と変わらず授業がある。

それも国語、数学、地理、歴史、魔法学、精霊学だ。

国語は中学レベルで漢字もそこそこあるが、優も穹も問題なく余裕である。

数学も中学レベルで穹は余裕だが、優は少し厳しい分野もある。

地理はこの世界の地理なので、初めて習う事だ。

歴史はこの国ができてからの歴史と、大陸で起こった大きな出来事。

魔法学は魔法の理論と各属性の対抗策。

精霊学は精霊術の理論と対抗策。

それとは別に選択授業があるのだ。

剣術、弓術、棒術、徒手格闘の中から一つ。

精霊術実践、魔法実践のどちらか一つ。

精霊術は人数が少ないのと、発動がどれもほとんど変わらないので、

一括り。

魔法は4大系統にそれぞれ分かれる。

他の雷、氷、光、闇は教師がいないのと、使える生徒もほとんど皆無なので設置されていない。

「と云うことです。それで2人はどうするのですか？」

「俺は徒手格闘と火属性だな」

「僕は弓術と精霊術にするよ。弓術だと疲れなさそうだし」

「では私も火属性にしますね。あと、徒手格闘は無理そうなので私は弓術にします」

苦手な属性のない優は、見た目的に派手そうな火属性を選び、穹は動きたくないのを理由に弓術。

フェルミは優と全く同じにしたかったようだが、弓術の穹についていくことにする。

「みんなは？」

穹が尋ねると、周りに集まってきた訓練合宿でのメンバーが考える仕草をする。

「あたしは剣術と精霊術」

「わ、わたしは水属性と弓術にしようかと思っています。ごめんなさい」

「自分は風属性と棒術ですかね」

見事な具合で全員が分かれる。土属性に人気あまり無いのは言うてはいけないのだった。

「選択科目の試験って実技か？」

「実技らしいです。魔法はお題の魔法をやつてのける。精霊術は精霊を召喚して武器に纏わせる」

「体術はどうするんだ？」

「分野毎に対抗戦をやるらしいです。弓術は的を射るだけですが：

…」

フェルミの説明に優が納得する。

「行事での戦闘もあるの？」

「年に2回の学年別の体術戦があります。魔術を使わなければ、何でもありの大会なんで毎年けが人が出てますが……。あとは学年末に学年関係無しで校内模擬戦があります。それは魔術の行使もありなのでかない危険ですね。安全面は徹底されてて死人は出たことがないらしいです」

「ずいぶん過激な大会があるもんだね」

穹が半分呆れた顔で答える。

「あとは、学校から選ばれたメンバーは他校との交流戦とかもあり

ますね」

「めんどろなだけだな、それって」

「そうでもないですよ？代表に選ばれば少なくとも、王国の騎士団への内定がほぼ決まります。そんな生徒を留年させたりできないので、選ばれば必ず留年回避が可能です。成績が悪い生徒は皆狙いに来ますね」

「俺は、それへの出場を目標にすることに決めたぞ」

フェルミは優と穹は勇者だから留年はないと言おうと思ったが、優のやる気を見ると言えなくなってしまう。

「騎士団って凄いの？」

「子供になりたい職業聞いたら、ほとんどの男の子が騎士って答えますね。ちなみにアイラの父は騎士団長です」

「うおっ、それはすげえな」

「そんな凄いものじゃないわよ。家に帰ってきたらお母さんの方が強いんだから」

穹の問いにフェルミが答え、それに驚いた優に、父を褒められて嬉しいのか顔の赤いアイラが否定を加える。

「どこの世界でも夫の立場は弱いんだな」

「優さんのお父様もそうだったのですか？」

「いや、俺に両親はいねえから分からねえが、一般的にはそっちが多かった」

「……………」

「いやいや、気にしないでいいって。俺も穹もそれぞれ両親の顔を知らねえから、辛かったりしねえから」

「うっ、うっ、2人とも大変だったんですね」

ヒューイがどこに感動したりする要素があったのか、泣いて同情し始めた。

「ヒューイ、僕は優を不意なふがら家族だと思ってるし、たぶん優も同じだと思う。だから別に僕達は辛くないんだけど」

「穹、ツツコミたい箇所が一箇所あったが、今回は見逃してやる」

優がジト目で穹を批判する。そんな穹に1人の少女が近づいてくる。

「わ、わたしにできることがあれば、何でも言ってくださいね」

「あっ、うん」

「あたしも何かあったら言ってね」

「分かったよ」

エリン、アイラにそれぞれ応答した穹が再び全員を見る。

「ってわけだから、これからよろしく」

返事はないが、それぞれ納得してるっぽい。

優に至っては何度も首を縦に振って頷いている。

## 科目選択（後書き）

これで第一章は完結です。

超展開でしたが、ここからどうしようか悩み中です。

たぶん、授業とかの日常をやった後で、中間テストがあると思います。

ゴールデンウィークは……やるか分からないです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 登場人物紹介

桜庭優

外見：黒髪黒目

性別：男

年齢：15歳

性格：めんどくさがり、やる時はやる、ツッコミ役多し、真面目

特技：体を動かすこと

魔術：全属性の魔法

紅葉穹

外見：黒髪黒目

性別：男

年齢：15歳

性格：めんどくさがり、どうしようもない時はやるが基本的には優に押し付ける、毒舌、猫被り

特技：トリッキーな動き、営業スマイル

魔術：精霊術

フェルミ

外見：長い銀髪に翡翠色の目

性別：女

年齢：15歳

性格：真面目、一途、お嬢様

特技：料理以外



魔術：4大系統を上級魔法まで（上級魔法の中でも簡単なものを一個ずつ）

アイラ

外見：真つ赤の髪に碧眼

性別：女

年齢：15歳

性格：思ったことは言う、正直、負けず嫌い

特技：剣術

魔術：4大属性の下位精霊術、火と風の中位精霊術

エリン

外見：茶髪赤目

性別：女

年齢：15歳

性格：おろおろ、可愛いもの好き、純粹、子供っぽい

特技：お菓子作り

魔術：光と闇以外の下級魔法、風と水の中級魔法

ヒューイ

外見：金髪碧眼

性別：男

年齢：15歳

性格：流されやすい、紳士

特技：社交辞令

魔術：4 大属性の下級魔法、火と風と土の中級魔法

## 日常

魔術学校での時間割は日本の高校とよく似ている。

50分の授業をして、10分の休み時間を繰り返すのだ。

「優、起きなつて」

「ん？穹か、後5分だけ」

「そんなこと言って寝てばかりだから、ずっと成績悪いんだよ」

今の授業は歴史の授業。

もともとこの国の歴史に興味のあった穹にとっては、かなり楽しい授業なのだが、そうではない優にとっては全く楽しくない授業なのだ。

つて言っても優にとっては国語、数学、地理、歴史は楽しくない授業。魔法学、精霊学、選択科目だけが寝たことのない授業。つまり、直接的に魔術や戦闘に関わるもの以外には興味を示さないのだ。

「優さんの分のノートは私が後で見せておきますので」

「フェルミは優に甘いんだよ。いくら優のことが好」

「それ以上言ったら、上級魔法をあてますよ？」

「い、いえつち」

フェルミは慌てて穹の言葉を途中で止める。

笑顔で言ってるが、目が全く笑っていない。

「ねえエリン、穹君がフェルミを怖がってるんだけど、何があったと思う?」

「わ、わたしは優君のことだと、思います」

「あー、やっぱり?でも、演技とはいえ穹君がフェルミを怒らせるとしたら、それしかないもんね」

魔術学校での席は最初は名前の順だが、後は自由席なのだ。

それで、優は外を見て時間を潰すこともあるので、窓際の一番後ろ、穹がその前、フェルミが優の横なのだ。

そして、エリンは窓際は寒いか暑いとのことで、廊下側の端で一番後ろ(端っこだと目立たないだろうとのこと)、アイラはその前、ヒューイは目が悪いとのことで一番前の真ん中となっている。

「優、一時間目は見逃してあげたけど、二時間目は起きててよね」

「任せとけ、眠くならなかったら起きとくからよ」

眠くなったら寝るのだな、とは誰もつつこまない。

「やっぱり寝たね」

「ゆ、優さんは疲れているのです。……たぶん」

二時間目の授業は国語、はっきり言って優にとっても余裕の科目なのだが、授業態度が悪いとあまりいい印象は与えないだろう。

フェルミのフォローはもはやフェローになっていない。

実際に優は日頃の鍛錬以外に疲れることをやっていない。

それに、精神的に疲れてるわけでもないから、優は大丈夫だと穹は考えている。バカだから。

そして、続く三時間目、数学の時間は頑張ろうとしてた。うん。でも『してた』なのだ。

「優は昔から数学嫌いだからねえ」

「そうなんですか？」

「そうそう。順位で優よりも下が1人でもいたら喜んでたぐらいだからねえ」

「そ、そこまでののですか……」

優の実態を告げるとフェルミは固まってしまった。

「けどまあ、優は英語はかなり強かったけどねえ」

「それは、穹さんよりも？」

「うん。僕が優に英語で勝てたことはないよ。だって満点以外取ったことないんだから、勝ちようがないし」

フェルミがかなり驚いた表情をしてから、少し考える仕草をしたあと、尋ねる。

「少し気になったのですが、英語って何ですか？」

「英語っていうのは、他の国の言葉だよ」

「優さんは他国の言葉が完璧だったんですね」

「そうだよ。でも、他国の言葉を猛勉強した理由が、『外国語喋れる男ってカッコイイじゃねえか』って理由だよ？」

「それは、少し…残念ですね」

「まあ、楽しんでたからいいと思うよ」

優が寝ているからこそ、できる話なのだ。

優が起きていたら、とっくに止められているだろう。

四時間目は地理の授業。

この授業も優にとっては眠たいものでしかないのだった。

この日は魔法学も精霊学もない、週で唯一の日なのだ。

国語、数学、地理、歴史が3単位、精霊学と魔法学が4単位、選択科目は5単位なのだ。

進級すれば、新たに誰でも使える無属性魔法や、魔工学などがある。

よって、今日の午前中は優がずっと寝ていたのだった。

「よし飯だな」

「ずっと寝てたくせによく言つよ」

「そんなこと言つ穹には飯やらねえぞ」

優は昼食の入った弁当箱を隠す。

「本当のこと言っただけで、そうなるとは辛い世の中になったもんだね？」

「そうだぞ。もっと賢く生きないとな」

「なら、そんなこと言つて、授業中も寝てる優は晩御飯抜きだね」先ほどまで優勢かのように見えた優の顔が、どんどん引きつっていく。逆に穹の表情は嬉々としたものへと変化していった。

「ずりいぞ。なら穹は明日の晩飯抜きだな」

「はあ、ねえ優、こんな誰も得のしない争いをしてどうするの？」

「うっ、確かにそうだな。なら、両方さっきのは無しってことでいいか？」

「まあいいよ」

穹の言葉で優が言い争いをやめる。

そして、優がサンドイッチの入った弁当を穹に渡す。

優と穹は魔術学校の寮に2人暮らしを始め、片方が昼食を担当したら、もう片方は夕食を日替わりで担当することになっているのだ。朝食は夕食の残りとかで適当に済ませる。

ちなみに今日のサンドイッチはカツサンドだった。

料理が得意な優の揚げたカツは分厚くて、揚げ加減も最高のカツサンドは、普通に店で買ったなら千円〜二千円はしそうなほどだった。

五時間目は選択授業の中でも魔術の方だ。

この授業では基礎として魔力の性質変化から入り、初級魔法、中級魔法を習い、卒業までに上級魔法を一人一つは覚えようと言う授業だ。

だが、はつきり言って今は使えなくても、卒業までに学校で習わなくても上級魔法を覚える生徒も少なくない。

貴族は基本的に古くから続く魔術の家系、または今はほとんど無き戦争で名を上げたと言う家系が多いのだ。

そういった家はその家の得意魔法や得意属性などがあるのだ。家の得意魔術などの上級魔法などを学ぶので、学校で習うことは魔法の幅を広げると言う意味しか成さないのだ。

それとは別に魔術にも、それを得意とする家系も少ないながらもあ

る。

そついった家でも、得意な武器があったりするのだ。

そして精霊術は少し変わっていて、下位精霊でも魔力の籠める量で威力が全然違うのだ。

威力を強めた中位精霊は上級魔法にも勝ることがある。

上位精霊は各属性に一体ずつしかないので、上位精霊にもなれば



かなり召喚できる者は限られてくる。

そして精霊術の授業では、各自が思い思いの武器に精霊を纏わせて、その持続時間を延ばしたり、精霊術の応用を考えたりするので、基本的に纏わせ方を学ぶ以外は自習に近い。

六時間目の武術の選択授業では

剣術は、剣の振り方などを軽く教えた後、刃を漬してある訓練用の剣でひたすら打ち合う。

毎回パートナーを変えて練習するので、いろんな相手を対人戦闘ができるのだ。

弓術は、弓の射方を習った後は、ひたすらの的を射ている。ほとんどが中心にあたる生徒は、不規則い動く的の軌道を予測して射抜く訓練をしている。

棒術でも、剣術と同じように基礎だけ教えて、後は実践で覚える感じだ。

徒手格闘は、名前の通りで武器を使わなければ何でもあり。殴る蹴る絞めるがありなので、型とか気にせず力だけが全てだ。

六時間目も終わったら、ホームルームを済ませて、家に帰るか寮に帰るかだ。

授業内容以外はほとんどが日本と同じスタイルなのだ。

2人は寮で暮らすことにしたので、今日も一緒に帰るだけだった。そして、次の行事、中間テストまでは、ずっとこんな日々が続くの

だ  
っ  
た。

## 日常（後書き）

授業内容説明が多かったですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 放課後

入学してから一ヶ月が経ったところに、あれはやってくる。

「萎える」

「どうしたんですか?」

「中間テストなんてイベントは消滅すりゃいいんだよ」

「それは無理な相談ですね」

授業が終わり放課後、優がフェルミに愚痴をこぼしていた。教室には優、穹、フェルミ以外は既に帰ってしまったようだ。

「普段から授業やってんだから、いらねえだろ」

「その授業の内容が定着してるのか見る試験なんだから仕方ないよ」

「ならよ、普段から勉強してねえ奴はどうすればいいんだよ」

穹の言葉への返しに、そこは威張るところじゃないだろ、と内心思う穹だった。

そこにフェルミからの確な指摘が入る。

「普段から勉強すればいいと思います」

「それが無理な人もいるってことを知るべきだ」

「それなら、私が勉強を教えてあげてもいいですよ？」

フェルミが顔を真っ赤にしながら優に言う。

「あー、それはいいわ。こう見えても穹って一夜漬け教えるの天才級なんだわ。フェルミには悪いし、今回も穹に教えてもらうことにするわ」

「……そうですか」

シヨボーンと聞こえてきそうなほどに、フェルミが落ち込んでしまふ。

だが、それに気づかない穹ではない。

「今回は優に教えるのめんどくさいし、地理、歴史、魔法学、精霊学は初のテストだから、優に教えるような時間はないよ？今回はフェルミに教わりなよ」

落ち込んでいたフェルミが急に顔を上げて、優の方を見る。目が『どうしますか』と語っている。

「なら、俺も今回は自分だけの力でやるぞ」

再びフェルミが落ち込んでしまう。期待したところを突き落とされたからなのか、さっきよりも落ち込んでいる。

「優って無自覚なのが、最低だよな」

「それってどうゆう意味だよ！」

「そのまんまの意味だよ。無意識に一番最低な結末を呼び込むから、他の人がどれだけ悲しんでたか」

「穹、お前は今まで何を見てきたんだ？」

少し真剣な顔で優が穹い詰め寄る。

穹は目を合わせずに横を見ながら、言うてはいけないこと言うような雰囲気、ゆっくりと語りだす。

「僕、実は見たんだ。優に勇気を出して告白とも取れることを言ったのに、優が気づかなくて陰で泣いてる人達を……」

「そ、そんなことが……。だ、誰が俺に告白なんて」

「小学校の時に、さっちゃん、せーちん、杉山さん。中学の時に、さっちゃん、瀬川さん、佐々木君、佐藤さん、咲って呼ばれた人。高校入学前に、さっちゃん、澤田さん」

「サ行多すぎだろ！全員サ行じゃねえか。それに何故かさっちゃん毎回登場してるじゃねえか、どんだけ諦めわりいんだよ！」

優が怒涛のツッコミ連発を続けるが、穹はそれを無視して続けようとする。

「確かに優ってサ行の人にモテるけど、優ってサ行嫌いだよな？自分桜庭だからサ行は被るとか言ってたし」

「俺、そんなこと言ってねえぞ？勝手に話作んなよな」

穹がニヤニヤしているの、遊ばれてたことに優が気づく。  
だが、話の途中しか聞いてなかった人物が、当然会話に入ってくる。

「私はフェルミなので八行です」

「あつ、うん。それで？」

「サ行じゃないです」

「確かにそうだな」

「だから、嫌わないで下さいね」

「嫌うわけないだろ。でも、サ行だから嫌ってるのは、穹が言  
った嘘だからな？」

「優さんが好きって言ってくれた。優さんが好きって言ってくれた」  
フェルミがぶつぶつと一人で呟いている。

優には聞こえず、穹にだけ聞こえていたので、穹は優の方を見てニ  
ヤニヤとしている。

「ど、どうしたんだよ」

「なんでもないよ。ただ、思わず笑いそうになる勘違いだなあって  
思ってる」

「意味分からん」

「そのうち分かるだろうから、大丈夫だよ。それまでは楽しませてもらうけど。プッ」

小さく笑って穹、吹き出してしまふ。

「まあ、いいけどよ。穹、今日はもう帰って、来週からのテストの勉強しようぜ」

「そうだね。じゃあねフェルミ」

「じゃあな」

「あっ、優さん、穹さん、さようなら」

その日は帰ってテスト勉強するのだった。



## 放課後（後書き）

前回は長かったので、今回短めです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

中間テスト？

「優行くよ」

「ああ、今行く」

穹の呼びかけに優が答える。

今日から中間テストと言うこともあり、優は徹夜で勉強していたのだ。

もともと、日頃から勉強していた穹は慌てることなく、いつも通り。優は直前から始めるタイプなので、徹夜する羽目になった。

「普段から勉強してないからそうなるんだよ」

「普段から勉強するぐらいなら、徹夜の方がマシってもんだ」

「そこまで勉強嫌いだと、僕は優の将来が心配だよ」

穹は心配と期待を込めた目で優を見る。

この場合の期待とは、今以上に面白い人生を歩んで行くのかと期待と、優が誰と結婚するのかと言う期待だ。

「俺としては穹の方が心配だな」

「なんで？」

「そりゃよ、最近の若者はキレやすいつて言っただろ」

優が勝ち誇ったかのような顔をしている。  
その表情と言動に穹は思わずため息を吐いてしまう。

「はあ、確かにそんなこと言われてるけど、優もその最近の若者なんだよ」

「確かにそうだが、精神年齢は大人だ。大人の俺がテスト受けるのって可笑しいと思うんだが、どう思う？」

優の言いたいののは、ようするにテスト受けたくないってことだ。  
そして、これが優の頭で思いつく、テストを受けなくてもいい言い訳なのだろう。

「優、大事な話がある」

「ど、どうしたんだ？穹。お、俺はテストを受けたくない言い訳を言ったんじゃないぞ？」

（うわぁー、優の奴自爆したよ。でも、可愛そうだからツッコミはやめとこう）

「いや、非常に言いにくいんだけど、この世界では15歳で成人だよ」

「えっ!?!」

大人だから受けなくていいと言う優の理屈を根本から覆すのが、15歳で成人だと言う事実だ。

優は思いがけない事実、声が出せなかった。  
そんな優に穹は、笑顔で止めの一言をかける。

「だから、優は中間テストを受けなくてはいけません」

その後の優は何も話さずに、死んだ魚のような目で学校まで行ったのだった。

「テストどうだった？」

「うーん、まあまあかな」

「簡単でしたね」

「それほどレベルは高くなかったと思います」

「わ、わたしは昨日勉強したところが出たので、なんとか」

「あたしも昔から習ってたことだったから、余裕だったわね。ユウ君は？」

アイラ 穹 フェルミ ヒューイ エリン アイラの順に発言する。  
そして、話を振られた優は顔を青くしていた。

「分からん。全く分からん」

「……じゃあ、みんなで答え合わせしようか」

優の発言で凍ってしまった空気を、穹が話題を変えて換えた。

「そうですね。では、歴史の問題からで、『戦争や、侵攻をしないと言う協定を何と言うか答えよ』この問題は何て書きましたか？」

「……平和協定」

「……不可侵条約」

「……」

フェルミが問題を読み、優以外の全員が同じ答えを答える。そして、優の顔がさっきよりも真っ青になる。

「優、協定を聞かれてるのに、条約を答えてどうするの？それにそれはドイツとロシアの条約だよ」

「たしかにそうだったな。次頼む」

優はどうやら、まだ精神ダメージを喰らいたいらしいと穹は思っていた。

それとは逆に優は、次こそ当てて自信をつけようと思っているのだ。

「じゃあ、僕が出すね。精霊学の問題で、『精霊術では上位精霊以外は武器に憑依させることで、召喚できますが、なぜ武器に憑依させないといけないのか答えよ』」

「自分は、下位、中位の精霊は実体がなく意思を持ったエネルギー体だから、入れ物となる器、つまり武器が必要。って書きました」

「わ、わたしも同じようなこと書きました」

「あたしは上位精霊は武器に憑依させなくてもいい、ってことも書いたわね」

「私も上位精霊まで書きましたわ」

少々答えにバラつきはあるが、皆言いたいことは一緒。その中でまだ答えてない優が明後日の方を向いている。これは本格的に壊れたかもしれないと思い、穹は追い討ちをかける。

「優は何て答えたの？」

「俺か？俺は、……下位、中位の精霊は死者を錬成しようとして、真理に体を持ってかれた。って書いた」

「……」

（これって優は本気で書いたのか？ただネタで言っているのかもしれない。なら、ツッコミを入れないと可愛そうだし、本気で言ってたとしたら、ツッコミを入れたら可愛そうだ。これはどっちにするべきなんだろうか）

元ネタの分かってない穹以外のメンバーは、何を言ってるのか分からないといった表情。

穹は、まさかの場面での登場だったので、笑いを堪えるのに必死になる。

「まあ、とりあえず優、今日は帰って勉強しようか」

「……そうだな」

空気に耐えられず穹が優に提案する。

それに優は、窓からはるか上空を見つめながら返事をする。

今日の科目は、歴史、精霊学、数学だった。

明日は地理、魔法学、国語だ。

そして3日目は、騎士になったら即編成のチームでも、すぐに作戦を作り、行動することが要求される。とのことで、3日目は他クラスも混合で作られたチームで実技試験だ。

そして、帰ってからの勉強は、国語は問題なし、地理は今更のことで魔法学にだけ集中して行われることになった。

## 中間テスト？（後書き）

やっと中間テストですね。

このままだと、行事やって2話ぐらい日常パート入れて、また行事ってループになりそうな気もしてきましたねえ。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。



中間テスト？

「優、今日のはできた？」

「おう、バッチリだぜ」

「じゃあ今日も答え合わせやるっか」

優の顔が一瞬だけ強張ったが、すぐに元に戻る。

昨日の答え合わせで全然ダメだったから、軽くトラウマになっているのかもしれない。

「しかしよお、『地図にある国名を書きなさい』って簡単すぎだろ」

「最初のテストだし、そんなもんだよ」

「優さんは三大国の名前はきちんと書けたのですか？」

フェルミの質問に、優は当然と言わんばかりの態度で答える。

「まずこの国がベネズス王国。西にある大国がコレスチア王国。東の大国がレイアン王国」

「そこはちゃんと覚えてたんだ」

「国名だけだけどな」

その言葉に他のメンバーは苦笑いを浮かべる。

確かに昨日は地理の勉強はしてなかったのだから、優のことを考えるとこの程度だろう。

「じゃあ、国語ができなかったとは思えないから、魔法学は？」

「授業も聞いてたし、平均点ぐらいは取れてると思うぞ」

「それなら、今回は大丈夫そうだね」

二日目は、と続く意味で穹は言ったのだが、優にはそこまで頭が回らなかったらしい。

「それより気になってんだがよ、明日って何すんだ？」

「テスト前に説明してましたけど、聞いてなかったんですか？」

「フェルミ、人の話を聞くことを優に求めるのは不可能だよ」

「そうでしたね」

「おい、お前ら、本人の前で失礼だと思わねえのかよ」

「思わないわね」

「思わないでしょうね」

「わ、わたしは……分かりません」

優が穹とフェルミに向けた言葉だったが、アイラ、ヒューイ、エリンが答える。

「とりあえず、優、明日は森で実習だよ。班は当日発表だから離れる可能性の方が高いかな」

「着替えとか飯はどうするんだ？」

「朝から始まって日が暮れるまでだからいらないよ」

「ふーん。でもよお、俺とか穹とかフェルミって今更、そんなやつでも一緒じゃね？強いのは選択科目で分かってるんだしよお」

魔法の選択科目では、火属性の中で一位がフェルミ、二位が優。精霊術では一位が穹。

格闘技でも、剣術で一位が優。弓術で一位が穹、二位がフェルミなのだ。

もはや、テストするまでもなく最高評価が見えているのだろう。

「ねえ優君。今回の実技の試験での目的は力も大事だけど即席チームでのチームワークとかの協調性を見るんだよ。だからこそやる意味があるんだって言ってたよ」

「ふーん、そんなもんなのか」

「ねえフェルミ。今年の一年強そうな人とかっているの？」

「レイアン王国の第二王子が珍しい魔法を使うとのことでは有名です。あとはコレスチアの天才と呼ばれてる方もいます」

「へえ、ここって他国の奴も入学できたんだな」

話の内容よりも別の部分に驚いている優に、他のメンバーから哀れみの目を向けられる。

「そのレイアンの第二王子が使う魔術ってどんななの？」

「噂でしかないのですが、すでに失われた魔術である陰陽術を使うらしいです。なんでもかなりの天才らしくて、兄がいるんですが、その兄ではなく第二王子が王位を継ぐかもしれないらしいです」

「そんな人が外国の学校に来ててもいいのか僕も疑問に思えてきたよ」

「レイアンでは王族の中で最強の者が勇者になるらしいのですが、現勇者はその方らしいです」

「なんか人目見たくなってきたよ」

穹の言葉に優とエリン以外の全員が頷く。  
優はどれくらい凄いのか分かっておらず、エリンは会ったら失神するかもとのことで頷けずにいた。

「コレスチアの天才は？」

「そちらの方も勇者です。コレスチアでは年に一回の大会での優勝者が選ばれます。その方は初出場から3連覇中の勇者です」

「どんな魔術を使うかって分かってるの？」

「こちらが変わった魔術としか聞いてません」

「つてか、今年は勇者多すぎだろ！」

「またも優がずれた指摘をするが、一応全員が思っていたことだった。

「三大国の勇者が全員同じ年つてのは、おそらく初めてのことですね」

「そいつらとは戦いたくねえな」

「僕もそう思うよ」

「どうしてですか？」

ヒューイの問いかけに二人は顔を見合わせて宣言する。

「「めんどくさそうだから」

「「あっ、そうですか」

「「でも、いずれ戦うことにはなると思うわよ」

「「どうして？」

穹の問いかけにアイラはため息を吐きながら答える。

「穹君も何にも分かってないわね。いい？各国での競技大会とかがあるんだから、そんなイベントには勇者は強制参加させられるんだから、いずれ戦うことになるに決まってるじゃない」

「ああ！と二人とも納得する。」

「その前に魔術学校内での武道会や、模擬戦とかで戦うことになると思いますけどね」

「でも、校内戦じゃ実力は出さないと思いますよ」

「じゃあ、この先で一番めんどそうなのは競技大会ってことではないのか？」

「たぶんいいと思うよ」

ヒューイ、フェルミ、優、穹の順で発言する。

エリンはほとんど黙っているが、口数の少ない人なので、特に異常はない。

「ねえフェルミ、競技大会の日って風邪で休みとかってダメなの？」

「怪我でも病気ででも治癒魔法で一気に回復させられるのがオチだと思いますよ？」

「やっぱりそうだよな」

「まだ先のことですし、とりあえずは明日の実技試験ですよ」

「……それも憂鬱だね」

その日は空気が悪い方向に進みつつあったので、これで解散になった。



## 中間テスト？（後書き）

エリンとヒューイが空気です。

扱いにくい子は嫌いですね。

何かこのままだと出番が減らされそうな気がするので、何か大役でもあげようかなとも思っちゃいます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。



## 実技試験？

「誰？」

朝、魔術学校にいつも通り言った優と穹は、学校に貼り出されていた紙を見て、思わず声が漏れる。

今日は森での実技試験。クラスに関係なく班を作って行動するのだが、優も穹も自分の班に知ってる名前がないのだった。

「ルイン＝レイアンです。どうぞよろしくお願いします」

「優だ。よろしく」

優の班でもそれぞれが挨拶を交わす。基本的には4人班で、あとは後半で微調整なので優達の班は4人だった。

その後も作戦なんてものはほとんど考えず、敵が出たらとりあえず目に付いたのを倒す。と言った性質の悪い不良をしか思えない作戦になる。

「穹です。よろしくお願いします」

「ソフィアだ。よろしく」

「俺様はルーシスⅡメナスだ。俺様と同じグループになってラッキ―だったな。俺様が魔物も魔獣もすぐに殺してやるよ」

(うわあゝ、うざいなゝ。優だったら無言で殴ってるかもな。まあ、僕はそんなことしないけどさあ)

もう1人も自己紹介をして、作戦を立てようとしたが、1人ウザイのがいるのと、メンバーが積極的に話すタイプでないと言う理由で、ノープラン。

そのウザイ奴は『魔物が出てても魔獣が出てても、俺様ならすぐに倒せるね。こないだもシルバードラゴンが俺様の屋敷に攻めてきたんだが、魔術なしの剣術だけで討伐したんだぞ』  
とか言っていたので、話など進むはずがなかった。

(シルバードラゴンってSランク指定の魔物の中でもかなり上位だったと思うんだけどなあ。たしか、上級魔法使える魔法使いでも瞬殺されるらしいし)

「なんだ、何にも出ないじゃないか」

「入って10分もせず何か出てきたら、森ってかなり危険ってことになりますからねえ」

「ふん、まあそれもそうか。おいその女、そんなとこにいないで、俺様の隣に来たらどうだ」

ソフィアはルーシスの方を一度だけ見て、無視する。

（この手のタイプは思い通りにさせといた方が、扱いが楽なものにな調子に乗りすぎたら潰すんだけどね）

「ルーシス様。そこに魔獣が出ましたよ」

森に入って15分ほどでウサギの魔獣が出てきた。

一日歩き回っても、数回しか魔獣や魔物に出会わないのに、こんなにすぐに出会うのは少し珍しい。

ちなみに、穹はルーシスを『様』付けしてるのは、面倒なことを言われないためだ。

「分かってる。〈ファイアボール〉」

「……」

ルーシスが魔法を放つてすぐに、元々喋ってなどいなかったが、全員が言葉を失う。

5mそこらの距離で放った魔法が外れたのだ。

普通は10m以上離れていても外すことはほとんどないのだ。

「い、今のは練習だったんだ。次が本番、次が本番。〈ファイアボール〉」

先ほどの魔法に驚いていた魔獣は、今度は10mほど離れて様子を伺っていたが、次は命中する。

「当たった！当たったぞ。俺様が倒したんだ」

「はあ、そうですね」

「……………フン」

ソフィアの態度は素っ気無いが、その理由は穹にも分かっていた。ルーシスの魔法は魔獣に全くダメージを与えなかったのだ。

「そんな、どうしてだ！」

ダメージも与えなかったことに、ルーシスは驚いて穹達に問いかける。  
それに穹は優しく答える。

「簡単な話ですよ。魔獣も魔物も毛皮や鱗に魔力を流していて、無意識に魔力の防御膜を張ってるんですよ。この魔獣はかなり下位の魔獣ですので、防除も薄いですから、シルバードラゴンを倒した時のように、その剣で倒してはどうですか？」

性質の悪い笑みを浮かべながら、ルーシスの腰に据えてある剣を指さす。

遠まわしに、こんなのに負けてるようなら、シルバードラゴンになんて勝てるわけないだろと言っているのだ。

その意味に気づいてか、気づかずか、ルーシスは剣を抜きさる。

「そうか、なら剣で倒せばいいんだな」

「そうです。……………できれば、だけどね」

後半は小声で呟いたので、ルーシスには聞こえてないらしい。

ソフィアは穹の言いたいことに気づいていて、小声で言ったことも聞こえていたのか、軽く口元は釣りあがっている。

「もういないじゃないか」

「では、次の獲物を探しましょうか」

少しの時間があつたので、魔獣もどこかへ行ってしまったらしい。攻撃してくるのを待っていてくれる魔獣など、ほとんどいないので、これが当然と言えば当然なのだ。

「あなた、性格悪い」

「そうですか？自覚はなかったですが、そう言われればそうなのかもしれませんね」

ソフィアが穹の隣でボソツと呟く。  
穹としても、分かっていたことなので、特別驚くようなこともなかった。

ガサガサ

少し離れた木の方で何か近づいてくる音がする。

「何か来たぞ」

「じゃあ、今度こそルーシス様のカツコイイところを見せてください  
ね」

「まかせておけ」

ルーシスが剣を持って走っていく。

(馬鹿は扱いやすいな)

「あなた、やっぱり性格悪い」

「あれ、声に出してた？」

ソフィアは黙って首を横に振る。

「じゃあ、どうして？」

「わたしは意識すれば相手の考えてることが頭の中で直接聞くことができる」

「じゃあ、それで聞いたの？」

ソフィアはコクコクと頷く。

「それってプライバシーとか無視だよな」

「見つからなければ大丈夫」

(それって本人に言っちゃったら意味ないよね?)

今回は聞いていなかったのか、ソフィアは返事をしない。

「ヤバイぞ。ゴブリンナイトとゴブリンロッドだ」

「あつ、そうですか。シルバードラゴンよりは弱いので僕らは手を出さなくても大丈夫ですよね？」

「……やっぱり性格悪い」

ルースは穹が助けに来てくれるものと思っていたので、何も言えずにいた。

## 実技試験？（後書き）

今回は穹がかなり性格悪くなりましたね。

ちなみに前回の話で張った伏線が早くも回収されました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。



## 実技試験？

「ルース様ならやれます。どうぞお一人で倒されて、じゃなくて、倒して来てください」

穹がわざと言い間違えたのはソフィアは気づいていたが、ルースは気付かなかったようだ。

「そんなの当たり前だ。俺様に倒せない魔物なんていないんだからな。でも、今回は貴様達にも出番をやるうって言ってるんだ。俺様に感謝して魔物と戦って来い」

(うわぁーうざいなー。魔物にボコボコにされないかなあ)

心の声が聞けるソフィアが穹の方を見て、呆れたような表情で見ている。

「僕は成績とかいいんで、ルース様だけで倒して下さい。僕は見てますから」

「そ、そんなことを言わずに、な？」

(やっぱり僕達にやらせたいんだなあ。てか、魔物もうすぐそこまで来てるんですけどお)

「魔物、すぐそこまで来ますよ。それに本当にシルバードラゴンを倒したんなら、アレくらい余裕ですよ。嘘じゃなかったら、です

けどね」

「そこまで言うなら俺様の本気を見せてやるから、しっかり見ておくんだぞ！」

(よし作戦通り。めんどろだから戦いたくないし、バカっぽいから単純に操れる)

「あんたより正確悪い人って見たことない」

「それって褒めてる?」

穹にだけ聞こえるように、話しかけてきたソフィアは小さく顔を横に傾げる。

「じゃあ、いい意味ってことでとっておくよ」

「い、今から戦うからな！終わってから手柄を横取りされたって言っても遅いんだからな！」

魔物と向き合ったルーススが最後の希望を託して尋ねてくる。

だが、穹もソフィアもそれに応じる気はない。

むしろ早く倒されるように急かしたいぐらいだろう。

「ルース様、当たって砕けるですよ。いろんな意味で」

「貴様、それはどういう意味で言っている!」

(これは気づかれたのか?それとも『いろんな意味で』って言ったから聞き返してきただけなんだろうか)

「馬鹿っぽいから、意味に気づいたりしないと思う」

「あつ、やっぱり？まあ、この場合の碎けるは再起不能になれって意味なんだけどね」

「えげつない」

ルースとは少し距離を置いているので、ソフィアとの会話はルースには聞こえていなかったらしい。

「来た」

穹が呟くと同時にゴ布林ナイトとゴ布林ロッドが出てくる。

ゴ布林ナイトは名前通りの前衛で、ゴ布林ロッドは後方から魔法攻撃をしてくる。

「このお、やってやる」

ルースは剣を抜き、向かってきたゴ布林ナイトに切りかかる。

「剣はできるんだ」

穹が思わず呟く。

ゴ布林ナイトとほぼ互角に剣で打ち合っているのだ。

魔法はダメダメでも剣術はそれなりにできるらしい。

「ハーハツハツ、俺様に勝てるんでも思っているのか！」

（いや、あなた、最初はいい感じだったけど、どんどん押され始め

てますけど……)

ルーシスは笑いながら剣を繰り出す。

穹はルーシスを見ていて悪役にしか見えなかった。

笑いながら剣を振る奴など、戦闘狂か悪役ぐらいだろう。

そのとき、ゴブリンロッドがソフィアに向かって魔法を放つ。

「銃」<sup>ガシナー</sup> <魔力分解弾>

闇の低位精霊を纏った弾を合計で6発、<ロックボール>の軌道上に撃つ。

「結界」

ゴブリンロッドが放ってきたのは、土属性の<ロックボール>で、岩の塊が合計で6つ、ソフィアに襲いかかる。

だが、そのどれもがソフィアに届くことはなかった。

ソフィアの言葉の後に、足元が赤く光り、赤い外周の円がソフィアを中心に3mほど広がったのだ。

赤い線が空中にも延びている、その部分にロックボールが当たった瞬間に消え去った。

一つをソフィアの結界が消し去り、消し去った<ロックボール>の軌道に撃った弾が結界に触れ、結界が一瞬にして消え去る。

ソフィアが「なっ!」と言っていたが、残り5つの魔法を見て、直撃する覚悟を決めたようで、目を閉じる。

だが、その体に<ロックボール>が直撃することはない。

穹の精霊術ですべて消し去られたのだ。

穹の<魔力分解弾>は触れた魔法の魔力を消し去る。

つまり、魔法は魔力でできているので、穹の精霊術で分解されて消え去ったのだ。

もちろん限界はあるが、ゴブリンロッドの攻撃程度なら簡単に無効化できる。

ソフィアの結界も、ゴブリンロッドの魔法に対応できるレベルまでレベルを落としていたので、穹の精霊術で無効化されてしまったのだ。

「さっきの私の結界に加えたルールは『魔法は一切通さない』。あなたのはたぶん精霊術。それも効果はわたしの結界とほとんど同じ。そんな精霊術見たことない」

ソフィアは彼女なりに驚いているのだろうが、言いたいことは、さっきの精霊術で何をしたのかってことだろう。

「僕は弾に闇の精霊を纏わせたただだよ。それより、君の結界は見たことないけど、どの系統の魔法なの？」

「そんな武器も見たことないけど、まあいい。わたしのは魔法じゃない、呪術。一部の特殊な人間にしかできない魔術。わたしはこの力で勇者になった」

（わお、フェルミが言ったた、どんな魔術がよく分からない方の魔術の正体がこんなにあっさり分かるとは思ってなかったなあ。それもおんなじ班だったとか笑えてくるかも）

「？わたし、何か可笑しいこと言った？」

突然クスクス笑い出した穹が不思議なのか、ソフィアは聞き返してくる。

「いや、まさか勇者に会えるとはって思ったただけだから、気にしないで。それより、もっと君の呪術が見てみたいな」

「それなら別にいい」

ソフィアは両方のことに纏めて答えて、魔術の準備をする。と言っても術名を言うだけなのだが。

「結界」

今度はゴブリンロッドの周囲に広がる。

ゴブリンロッドがまたくロックボール>の魔法を放つ。その瞬間、ゴブリンロッドが地面に倒れた。

飛んできたくロックボール>を穹が消し去り、ソフィアに仕掛けを聞く。

どうやら、ソフィアは穹になら教えてもいいと思っているらしい。何故かは不明だが。

「今の結界は『魔法を使った者の酸素を奪う』ってルールにしたから、アレは酸欠で倒れた」

(呪術……恐ろしいです。でも、これって魔術の中で最強なんじゃ……)

「聞こえてる。……それに最強ってわけでもない。一枚上手の相手ぐらいなら呪術の方が上。でも、もっとレベル差があったら、結界のルールが無理矢理破られる。だから最強じゃない」

ソフィアの心の声が聞こえるのも呪術なのだろうと言うことで勝手に穹は納得する。  
ちなみに忘れてはいけませんが、ルーシスはまだゴブリンナイトと戦っているのだ。

「結界」

ソフィアの周りに結界が展開される。

「召喚」

ソフィアの少し前に木の人形っぽいものが召喚される。  
召喚は無属性の魔法なので、精霊術師にも使える魔法なのだ。

召喚された木の人形は、高さ50cmぐらいで、両手は鎌でできている。

顔は不気味な笑みを浮かべたような表情になっており、見るだけで寒気がする。

「憑依」

瞬間、ソフィアの体が力なく崩れる。

穹はソフィアのところに向かおうとするが、結界で入れない。

ギギギギギギ

ソフィアが倒れると同時に、木の人形が動き出す。

穹はソフィアの最後に呟いた『憑依』の意味を理解する。

ソフィアの意味は人形に行ってるから、人形が動いているのだ。

そして、本体に危害を加えられないように結界を張ったのだろう。

木の人形は一気に駆けて、ゴブリンナイトのところに行く。  
ルーシスが驚いた表情を見せてから、助けにきてくれたと思ったの  
か、後退して避難する。

穹はこれまで頑張ってたルーシスには一切何も言つつもりはないら  
しい。

ゴブリンナイトの一撃一撃を人形は華麗に躲す。

少しずつだが、ゴブリンナイトの攻撃を躲しては鎌で一撃を加えて  
いる。

傷が全て浅いので、小さな切り傷が大量にできる形になっていて、  
これはこれで不気味だった。

今度はカウンターで一撃の入りが甘く、ゴブリンナイトに攻撃を  
躲され、空振ったところに一撃加えようとしている。

さすがにゴブリンナイトは並の兵士と互角ぐらいで戦うので、いい  
動きをする。

これと互角に戦っていたルーシスは兵士としてはなかなかいい人材  
になるかもしれない。

ガッ

ゴブリンナイトの剣が木の人形を二つに斬る。

頭から縦に斬られた人形は一瞬にして再生し、軽く油断していたゴ  
ブリンナイトの左足を切り落とす。

ゴブリンが声にならない悲鳴をあげた後に、人形に止めをさされる。  
ついでにゴブリンロッドにも止めをさす。



死んだのを確認してから木の人形が動かなくなり、代わりにソフィアが動き出す。

そしてソフィアはゴ布林ロットとゴ布林ナイトの討伐証明部位を剥ぎ取るのだった。

## 実技試験？（後書き）

今回はけっこう長めです。

ソフィアは呪術師と言う設定ですね。

これが、なかなか強い。

もしかしたら優と穹よりも強いかもしれませんw w。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## 実技試験？

「呪術ってさあ、強すぎだよな」

「さっきも言ったけど、そんなに強くない」

「いやいや、十分強いって。結界だけでほとんどの奴は倒せると思うよ」

「でも、そこまで。頑張っても全体では、上の方が精一杯」

ソフィアがゴブリンナイトとゴブリンロッドを倒してから、ずっとこんな感じの会話が続けている。

その様子にルーシスが黙ってるわけじゃないが、2人とも無視し続けている。

「俺様の話を聞け。その女は、俺様の妻にしてやると言ってるんだ。未来の夫ともっと仲を深めようとは思わないのか！」

「死ねばいいのに。じゃなくて、あなたも本気を出せばわたしに勝てると思う」

「酷い言い間違いだけど、否定はしないよ。僕が本気出しても、技の威力が上がるだけだから勝てないよ」

ソフィアと穹はルーシスの方を、チラ見しながら言っているが、ルーシス本人は全く気づいていないらしい。

「技術タイプには負けない。でもパワータイプが相手だと勝てない。そう言う意味では精霊術師は苦手」

「結界で動きを封じちゃえばいいんじゃないの？」

「結界には大きさに上限があるし、発動中は魔力をかなり消費するから、燃費悪い。相手に結界を張る時は座標指定が難しいから、実践では使いにくい」

穹には少し心を開いたのが、ソフィアは少し長文で返してくれる。

痺れを切らしたルーススが、ソフィアの横に移動する。

「こんな奴放っておいて、俺様と話をしろ」

「……………」

ソフィアはルーススを見ようとしなない。

「こんな奴のどこが良いと言うんだ。俺様の方が、地位もあるし、強いし、ルックスだって負けてない」

「……………地位以外は負けてる」

「いや、ルックスも負けてると思うよ？」

「そんなことはない」

実際にルーススは無駄に格好いい。

黙ってさえいれば、それなりにモテるだろう。

それでも穹ほどではない。

だが、穹は自分のことを格好いいと自覚していないので、ルーシスの方が格好良く見えてしまう。

「あなたは、アレには勝ってる」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

「うん」

またもや2人で話し始めたので、ルーシスの表情が怒りのものへと変わっていく。

「貴様に決闘を申し込む！勝った方がその女を妻にできる」

突然のことに穹は全く付いていけない。

そしてソフィアも状況に付いていけない。

「遠慮します」

「えっ!?!」

予想外の答えに、ルーシスは驚きの声と表情を隠しきれない。

「で、でも、勝ったらこの女を妻にできるのだぞ?」

「別にソフィアと婚約したいわけでもないし、好きなわけでもないんですけど」

「あなた、失礼。わたしの魅力にあなたもメロメロ」

ソフィアの発言の意味が分からない穹は、意味を聞くこともできないので、スルーすることにした。

「さっきのは、俺様に言ったのだろう？俺様は、俺様を助けにきた貴様に既に心奪われている」

ルーシスの告白とも取れる言葉に、ソフィアはため息を吐いてから、ルーシスを見据える。

「お前に言ったんじゃない、消えるゴミ虫」

「い、今何て言ったんだ？」

「消えるゴミ虫って言った」

ルーシスはニヤニヤしながら、穹の方を見る。

「らしいぞ。俺様達はこれから夫婦の時間を過ごすんだ。消えるゴミ虫が」

(こいつの頭って、どこまでおめでたい解釈してるんだろう)

「この人に言ったんじゃない。お前に言った。二度と喋りかけないで。気持ち悪い」

「お、俺様に言っただのか……。だが、何なんだ、この心の奥から湧き出る快感は」

「気持ち悪いから視界に入らないで」

「それは言い過ぎだと思っや」

「気持ち悪い人間に、正直に気持ち悪いって言って何が悪いの？」

ソフィアは思ったことは言う性格らしい。

「『気持ち悪い』…か。何て良い響きなんだ。俺様にもって言うてくれ」

「……………」

ルースは何かに目覚めたらしい。

「ほら、どうしたんだ？早く言うてくれ」

「何も言わない」

「どうしてだ」

「…喜ばす、だけだから」

ソフィアは顔を背けながら言う。

それは、恥ずかしいとかではなく、本気で引いてるからだと言っていることが表情から分かる。

「喜ばない。そんなことで喜ぶほど、俺様は変態になったつもりはない」

「お前は変態」

「はっっ」

ルーシスが気持ち悪い声をあげる。  
ソフィアは思わず穹の影に隠れる。

「とりあえず、この話は終わってからにして、ご飯にしない？」

「わたし、お腹ぺこぺこ」

「まあ、後からでもいいか。それに、俺様も腹が減った」

「そうだと思って、持ってきました」

チアチアチアチアツチアチアーン

「調味料。ってことで食材探ししよっか」

今すぐ食べれると思ってたのか、ソフィアもルーシスも表情が歪みながらも、食材探しをするのだった。



## 実技試験？（後書き）

穹達の方はひとまず終わりです。

次は優達の方に移ります。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7364y/>

---

2人で1人の勇者様

2011年12月24日10時10分発行